
元はチンピラ。今世もチンピラ？

るー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元はチンピラ。今世もチンピラ？

【Nコード】

N1997X

【作者名】

るー

【あらすじ】

織斑一夏はチンピラとして生まれたとき――

原作主人公にクロス先の性格を掛け合わせたORIMURAITI
KA

途轍もなく独自解釈やオリ設定がぶちこまれ。

“善悪相殺”の定義等は…なに、それ？おいしいの？的に置き去り

キーワードの如くに“っぽいモノ”なので原作大事な人はスルー推奨

千冬姉が“恋愛”に対して駄目な方向にまっしぐら

アニメしか見てないので、あしからず

ラウラ・ボーデウィッヒ 上

—— こんな、チンピラ相手に……ご苦勞な事でさあな……

思考するは自身の境遇。そう境遇……何せ彼は——

高速で空を切り裂きながらに…… 相對する者に対して哀れに思いつつ
PICを微細に操る。迫り来るレールガンを“挑発するように紙一
重で避ける為に”

感情が手に取るように分かる。苛立ち、怒り、驚愕、理不尽

—— 若いですな……

己と“変わらない年恰好”の少女に対して

—— と言って……当たってやれるわけにやいかねえでさ。こちらら
……もう、コレでおまんま食っていくしかないですしね

さらに放たれてくるサブマシンガンの雨。何時の間にかレールガン
の射程よりも接近されておるも

…… 相對する者が纏う機体の一世代も下。さらには量産機でありな
がらに

—— ？き出しですぜ……？軍人さんなら、もっとスマートに闘りな
ゃ

さんな

弾雨を——記憶に残る“竜騎兵”^{ドラゴン}を駆って闘ったままに

——本当……チンピラのあたしや、何ぞ、こんなんやってるんで
しょうね

馳せるは“前回と思しき”^{おぼ}《人生》”

幼い頃……いや、生まれてきた時から知っている。剣の振り方も“こ
んな馬鹿げたモノ”を扱うのも

あの全身を鉄で覆う“モノ”とは違い。現在、彼が操る“モノ”は
相対的な姿

何せ……頭部装甲なんぞない。手と足に必要な最低限と言うのもおこ
がましい……どう見たとしても

フォルムの体裁を取っているだけ程度にしか彼には思えない。それ
も仕方ない

何せ——

——カカカ……絶対防御ねえ……

唾棄するように嘲る。唇が作り出す。その表情を

全てのモノに備わっている操縦者の死亡を防ぐ能力。発動すればシ
ールドバリアーをゴツソリと持っていられる代物

—— イイ時代になったもんさ

嘲る。合^が当^た理^りが促した風を斬る音は…… P I C。イナーシャルキャ
ンセラーによって“彼にとって”は無音と化し

—— そう。イイ時代さあ…アタシ以外の奴にはねえ…

嘆くと言うわけではない。しかし——嘗てのような、地獄の釜で
只管に踊り狂ったような双輪懸は無くなった

元から無い。命を懸けるような戦いが

ここにはない

「貴様ああ！！逃げてばかりかあ！！」

オープンチャンネルから響くは少女の甲高い侮蔑。どこか硬質を感
じさせ、幼さとは関係の無い相手を身震いさせる怒声であるうと

「カカカカッカ！！」

嘲るように特徴的な笑いで答える。《前の人生》においては自然に、
《この人生》では意識しなければできない笑い声を上げて

追いつがる…“黒い雨”を駆る灰色の髪と変色した金色の瞳を持つ
少女へと

鼻で笑うような表情のままに

彼——織斑一夏はコロッセオを背に天高く太陽を目指す

——くっ！AICが完備していれば、物の数ではないというに！

“黒い雨” シュヴァルツェア・レーゲンを駆る少女

ラウラ・ボーデヴィツヒは心中で悪態をつきながらに太陽を目指して飛翔する

敵。日本が生み出した第二世代機……“打鉄”を追う

——世界唯一の男性IS適正者が聞いて呆れる……！

常のラウラでは有り得ない程に激化している

無理も無い。何せ、彼女にとって——

——こんな……こんな情弱の奴の為に、教官は！

蘇るは“あの事件”。ラウラが唯一……尊敬し敬愛する。ブリュンヒルデの称号を持つ——

織斑千冬の弟なのだから……

「はあああ……！」

第三世代機、それもラウラ専用機として特別にチューンされている機体と

かたや第二世代機。それも量産された“打鉄”では性能そのものに隔たりがありすぎる

故に、いとも簡単に追いつけるのだが――

「なぜだ?!?!」

パワーもスピードも総てが凌駕しているというのに――振りかぶったワイヤーブレードは巻き払われた

「真っ直ぐすぎやすぜ…お嬢さん」

――と…あたしも若いってことですかい? いやあ…参りましたねー

心中で告げるつもりではなかった言葉に対して、自身で驚きつつ惚けた様に零す

そんな事を考えてられるほどに…一夏はラウラが繰り出す斬戟の数々を軽く往なす

横一文字に払われた一閃を、“打鉄”のその無骨な甲冑の袖と見立てる事のできるウイングバインダーを手繰り寄せて

一夏は自機では繰り出せないほどの強烈さを放つ一撃の側面をで叩く事によって軌道を変える

それも——その圧倒的な暴力を機体に。ウイングバインダーに伝わらないように。合気道さながらに

袈裟斬りに放たれた一太刀を自らが持つ刀型近接ブレード。太刀によつて……打ち払う

ラウラが袈裟斬りの構えから走り出したブレードの柄を叩く事で

肩の動き、筋肉の動き、間合い、呼吸e t c……そう、初動。何もかも事を成す目前の仕草から

ラウラの行動を看破し、“打鉄”であつても……切り抜けられる段階から一夏は阻止する。総てを

「あああつあつあ……！！！！！！」

「イイですぜえ……あたしや。一生懸命な人は大好きですよ」

雄叫びを上げて……ブレードを、マシンガンを、幾多の武装を持つて攻め立てるラウラ

——いい感じの“仕上がり”で……後は釣るのみですなあ！

視界に入れる自機のヘッドギアに搭載された半透明のバイザーに映る状況。機体維持警告域

スペック差は見えないところで確実に蝕んでいる。それをラウラは

気づかない

風下から追い立てるようにサブマシンガンを放ちつつにさらに刃を立てようとする

ソレに対して

「へえ…へへ。さあ、ファイナレといきましょうかい？お嬢さん」

サブマシンガンを左のバインダーで受け止める。マシンガン程度あれば、外見からもその分厚を一発で理解できるぐらいの厚い装甲を

唯一持つ部位。たとえば、近距離で集弾性が上がっていようが貫けな
いのは知っている

伊達に、幼い頃から——“しののたはり創始者”と関わりを持っていやしない

押さえ込んだ銃弾をそのままに、突っ込んでくるスピードをカウン
ターの要領で蹴り落とす

一瞬の押さえ込みにしかならないが——真の狙いは其処ではない
駆ける。蹴り出した反動でより高く…元々目指していた頂点。太陽
のへと直向に駆け出す

そうして——激情しきっているラウラは当然の如くに追う。猛追する

弾薬は切れてしまっているのだから、レールガンも、サブマシンガ

ンも…

激情のままに… 厳しい訓練を重ねた戦士であろうと… 本質は未だ少女。絶対的な経験が不足しているが故に

ワイヤーブレードを構えて疾走する

それが——分かつ

通常。地球から離れば、離れるほどに……増す。まるで見えない手が引きずり込むように

重力の井戸から逃れるためには、駆け上がる速度を求められていくのだ。比例するように

それはパッシブ・イナーシャル・キャンセラーでも例外は無い

幾らキャンセラーといえども限界はある。元が宇宙開発におけるマルチ・スーツから派生していった経緯を見れば

上も下も無い宇宙で何処に向かって駆け上がる？

幾ら、天才^{たいてい}が作り上げたモノでアレ……限界はある。天才が天才の為に作ったのであれば… また違いかもしれぬが

作り上げたのはソレを渡され……現存する487機のコアをやりく

りするしかない国家如きでは当然

それも高々…一国家如きが技術を掻き集めて作り上げた。天才一人にも勝てない傑作機

国が悪いわけではない。天才がおかしいのだから

——なぜ…！墜ちない?!?!

追い縋るなか…ラウラは思う。眼前の機体の有り得なさを

いや…機体ではない。だが、しかし。ラウラはソレを認める訳には
いかない

何時——己のシュヴァルツェア・レーゲンが錐揉み上げて墜落する
か定かではない高度で

第二世代如きで傍目に悠々と上り詰める。その男を

必死に追い縋るラウラの心中に忍び寄る——畏怖

「おお?! 頑張りやすな…! 感心、感心」

声を上げることで集中が途切れそうになるほどの限界域において

平常に離す男に対して

「ほんと、そういう一生懸命な方にゃあ…惚れちまいますよ」

ラウラの瞳に映る。一枚の金色の羽。幻想

言葉が脊髄を伝って脳に焼きつく

瞳が焼き付ける。

上昇の極点。バインダー 方向翼を切った

くると…そうすんなりとした言葉が当て嵌まりそうなほどに

まるで奇術か魔術かのように…反転する。上下が入れ替わる

重力総てが味方する方向へと——ラウラへと刃を立てる姿勢へと

ヴァーチカル・リバーズ
垂直反転

インメル・マントーン
「金翅鳥王剣」

盛大な装甲の破砕音が鼓膜を叩く中

熱に浮かされたように、その言葉が聞こえる

視界に映る。一夏の姿がその小さな胸に焼きつく

ラウラ・ボーデウィツヒ 下

―成層圏

辺り一面に散らばっていく黒の装甲片

青と白しかない視界の色にその黒は映えるように目をつくなか

「あれま……気を失っちまりましたかい」

インメル・マントーン
金翅鳥王剣を放ち終わった体勢のままに

一夏は頭を掻きながら

「……仕方ありませんですか。私の柄あたしじゃないんですがね……」

苦笑と共に洩れ出る言葉を皮切りに、墜ちいくラウラ。その小柄な体が重力に導かれていく様を追いかけたす

一方、一夏がラウラを墜とした事によって…

こちらは――

「いーちゃん……」

地上から遙か彼方へと飛び立った被保護者の安否を気遣う

短髪の緑髪。背丈は一夏よりも20cmほど低く年齢は今年15歳となる一夏に対して成年という違いの差

そして——彼女を端的に表すは…その巨乳。本来彼女が属している組織ではトップを張るほどの大きさを持つ

童顔に眼鏡を掛けた心根の優しい女性。山田真耶

「いーちゃん」

再度、虚空へと問いかけた憂いの言葉は轟音に掻き消された

小柄な体に不釣り合いな破片。シュヴァルツエア・レーゲンの装甲の残骸を纏ったラウラの思いの外早い墜落

追いかけている一夏は残り少なくなってきたエネルギーを搾り出すように滑空していく中

意識下^{バイザー}投影に一通のメッセージが着く。やけにゴテゴテとしたデフォルメのウサギ耳のマークが付いたメールの形で

「カカ………時と場合を考え貰いたいもんですぜ」

送り主が広義的な意味でそんな事を考慮するわけがない。広義的な意味では——ならば

メールが自動再生される。一夏が滑空しながらも目前へと到達したラウラを拾い上げると同時に声が響く

「やつほー。いつくん。またまたお姉さんから宿題だよー」

間延びした声音。能天気な声音。けれどもその声は無邪気に聞こえながらも

「問題です！小さなウサギさんを狙う恐ろしい獵師さんが大勢やつて来ました！」

微かに聞こえてくる。耳元に悲鳴のような不安を押し隠さないままに叫ぶ真耶の言葉に掻き消されない

無邪気でありながら悪意を感じさせる様な

「さてさて、いつくんはどうするのでしょうか？！答えはお姉さんと今度会った時に聞かせてね？」

一方的に告げてメールは消失する。塵ホコリ一つ残さずに。だが――

そんな物に構ってられないほどに夥しい数の

「いーちゃん！ー！」

「そう、大袈裟に叫ばなくても聞こえていますってモンで。マァ嬢ちゃん」

「叫びたくもなります！ってどうか…いーちゃん！また私をお嬢ち

やん呼ばわりしてる?！」

「まあ、心中はお察しできますがね…私も四度目となりや、こつ、驚くのも無駄な労力かとね。思うわけでした」

「軽くスルー?! 酷い! 私の方が——」

真耶が見当違いな喚きを洩らしている間にも——無邪気な悪意がイタズラ
飛来する

此处。コロッセオ仕様のアリーナを持つドイツ軍のミサイルランチ
ヤーの弾頭が一夏へと迫り来る

「では、後ほどに」

「ええ?! いー」

サクツと切る。アレで喚いていながらも仕事は(・)できる女

「数は二十。弾頭種目は…ローランドVTX。捨てた装備を再活用
ですかい」

バイザー
意識下投影内に表示される迫り来るミサイルの雨を見つめながらに

バックアップ
——近接信管。予備起爆に触接信管ですかい

真耶から送り届けられるデータを流し読みしながら…量子化した
打鉄”の長刀を構成する

——設定電磁波は……

読み流す内容の中の一文に——口元を皮肉げに、ともすれば喜びに震えるように……歪めながら

「へ、へ、へ……」

“打鉄”を消す。滑空していた状況は真っ逆さまに落ちていく姿へ
ISスーツのみとなつて両の腕で抱く意識のないラウラの手を取り
自身の首へと巻きつけて

胸元で片手で抱く

——この世のことはひとの世のことはひとをいかに
剣理殺人刀が剣理活人刀か

抱いた小さな肩。遠い遠い記憶の彼方まえのじんせいを思い出しても抱いた事など
終ぞない人生

チンピラだ。国を売る。売国奴になつて小銭を稼いで……その日暮
らし

楽しい事が自身に起こる事などありはしない生き方であつたが——
——瞳に焼き付けてきた

チンピラはチンピラなりの筋を通し、生きた。“あの”生き辛い世
界でありながらも

一生懸命…生きた命達を見届けた。何の因果か二度目の人生

——今度は…真っ当に生きてみますかね。と決めたからにやあ…

「半端はできやしやせんな？ “警察の旦那”」

瞳を閉じる。焼きついた命の一つの姿。陰気な顔を下げた男が浮かぶ

「久しぶりの……陰義シノギになりますかね！」

雪車町一蔵チンビラは……織斑一夏チンビラとして生き始めていた

目を覚ませば……舞踏げんその中に居ると錯覚した

ソレが薄目を開けて、ボヤけた意識の中で初めて認識した感覚であった

ラウラ・ボーデウィヒにはそうとしか認識できなかった

なぜならば——飛来するミサイルを尽く断ち斬ったという現実乖離した現象を見れば

そう思うのが当たり前だ。何せ——断ち斬ったと完結しているのだ。ミサイルという物の結果が爆発で終わるしかないはずなのに

だから——より一層と思考が乱雑になる。ソレが軍人としてのラ

ウラ・ボーデウィヒを麻痺させ…少女のラウラ・ボーデウィヒを強く揺り起こす

何せ……

——ああ、私は、夢を、見ている

男の胸元に抱かれて死線を優雅に越えている

ラウラとて一端の少女だ。幾ら、アドヴァンスト遺伝子強化試験体の試験管ベイビー出だと言え

乙女であることに変わりなく…特に最近副長のクラリッサから変な知識を吸収している最中故に

——夢なら…覚めないでくれ

虚ろな意識の中。薄く開いた視界の先は——死線であお、少年の凛々しい顔

口元が釣り上がってはいるものの、少年特有のあどけなさど大人顔負けの深み。その両方が作り出す

惹きつける笑みを焼き付けるように

その太刀が繰り出す神秘に等しい剣技を焼き付けるように

薄れいく意識を徐々に手放した。胸に宿った……初めての感情に戸惑いながら

― 輸送機 機内

さて、時は進み…一夏と真耶の姿は現在は空の上の椅子

国際ISS委員会ご用達の簡易ISSハンガーを積載する専用機での空の旅路へ

「で？ドイツさん方はご納得と？」

「まあ……篠ノ之博士が関わっているとあれば、黙るしかありませんからね」

窓際から雲を眺めながらに頬杖をついて真耶へと問いかけた一夏へと返される言葉

心中、お察ししますというニュアンスが強烈に醸し出される哀愁を誘う雰囲気のままに告げる

「臍曲げられて…お飯取り上げられる訳にはいかない」と

「はあ…。コレで通算四度目。それでも各国の偉い人はいーちゃんを呼び出すのですから始末に負えませんねー」

肩を落として、疲れたという表情を浮かべる真耶へと

「まあ、あたし私くになしや根無し草の身ですんでね……哀れなチンピラこくせきに宿を提

供してやろうという慈悲深い方々なんですよ」

一夏の皮肉げな言い回しは……世界唯一の男性IS操者という厄介きまわりない肩書きを持つ故に

何処の国も喉から手が出るほどに欲しい人物

「いーちゃん……そろそろ、そのチンピラって言い方止めた方がいいですよ？」

好ましくないという表情をありありと浮かべながらに鼻の上に乗っかるように掛けた眼鏡を直しながら告げるも

「性分でさあ……勘弁してください。マーヤ嬢ちゃん」

悪戯小僧そのものの笑みで答える一夏

「また！いーちゃんはそうやって、すぐにからかう！！私の方が年上なんですからね！」

身長差も気にしての発言であるが

「いーちゃん。いーちゃん。と洒落た呼び方をする方にやあ……丁度いい呼び方でしてね」

何処吹く風と言わんばかりに告げる。瞳の中を笑みで染めながら

「で？今回もですかい？」

「もう……。今回もです。前回の“打鉄”は修復が間に合っていないの

で三機目の予備を次回は使用します」

軽く溜息を吐いて諦めた真耶が自身用に持ってきているIS“リヴ
アイブ”のソースを使って中空にウィンドを展開して

状況を説明する。三機の予備の内——二機が中破状態という
現実

コア自体にはダメージが入っていないが………相対する機体が毎度
の如くに一世代先かはたまた最新鋭の強化改造カスタムを受けており

そのドレもが国家代表候補の有力者となれば——

「いい加減……いーちゃんも専用機を頂いたらどうですか？篠ノ之博
士が用意なされているのでしょうか？」

「まあ……一理あるんでしょうが、どうも……ね。そもその為に四度の
襲撃？というべき罠があったりと……」

クツクツと品のない笑みで返す一夏

「わかつているなら——」

真耶が現状を招いている原因を分かっている一夏に更につのろつと
するも

「だから、こそですぜ？態々、そんなちょっかいを掛けてでも使わ
せたい機体がどうにも」

人差し指を真耶の口元を押さえるように立てて押し付け

「私^{あたし}にや……キナ臭いんですわ」

頭を振って元の視線の先。窓の彼方を見やる

「はあ……いーちゃんの言い分を理解できてしまう私が恨めしいです」

「力力。あの変態博士は適度に相手するのが一番でさ」

「……話は変わりますが、いーちゃん。どうやってアレだけの……その……」

「ああ、ありや……ですな。信管はマーヤ嬢ちゃんが調べてくれた通りでしたからね。簡単で」

向けた視線を真耶へと戻して一夏は手振り以示す。あのミサイルの群れを処理した状況を

「ま、ね。ISをね……戻したんですわ」

量子化^{パッケージ}したと表す。電磁波感知がISを装備している状態ならば必ず洩れ出る……稼働エネルギーの波に設定されているが故に

「へ？……戻したって、え、でも太刀^{……}は持ってたじゃないですか？
!?!」

通常、ISの装備はISの補助無しでは到底人間一人に持てるものではない

ソレを分かっている真耶が素っ頓狂な叫びを上げるのは必然で

一夏がそんな真耶の声に用意万端で耳を塞ぐのも必然。尚も喚き立つ真耶に対して再度唇を塞ぐように人差し指を立てる

「家の姉さん^{うち}とて素でおやりになるかと……思いますがね？」

「先輩といーちゃんの間を一般人に求めてもらいたくないな……代表候補生。って言うかモンドグロツソ出場者でも片手のクラスだよ……」

ウンザリと肩を落として嘆く真耶は続けて

「持てたのは分かったんですが……ソレでどうやって処理したんです？」

「何、信管の作動条件が分かってるんでさ……ようは満たさなればよろしいという訳でして……」

一夏は人差し指をミサイルに見立てて

「こつ、信管部と弾薬部を割いただけで」

見立てた手とは違う人差し指で指の第一関節を叩き斬る様な仕草で押し当てる

表情は付き合いの長い真耶等以外には完全に嘲笑ったような癪に障る笑み

「予備動作^{バックアップ}の触接信管を起動させないほどの剣速^{けんそく}で分割したと……」

もう呆れて事実しか言葉にならないという表情で真耶は呟くしかなく

「最新なればなるほどに…爆弾やらミサイルやらの誤爆^{ミサイル}ってのは起き辛い代物ですからね…へ、へ」

「……………まあ、どうせ今回の件も…相手方^{ドイツ}にはいいーちゃんのは何も残らないのしょうからいいですけどね」

「その点に関しては……………変態博士様々と言うべきですな…カァツカ力」

「もう、またそんな笑いかたをする!」

一夏の笑いに文句を告げて、肩を落として二つの苦勞——ドイツが背負う苦勞と自身が背負う苦勞^{いっとう}を忍ぶであつた…

ードイツ ISプロトコルニ

「ええい!!何とか、食い止められんのか?!」

壇上にて男が吼える。場所はこのコロッセオ仕様のアリーナの心臓部であり司令部

その場所にて一等立場が上の者が陣取る場所であるのは傍目にもわかり……………そんな者がうろたえているというのに

——無駄でしょうね。アッチの方が一枚二枚という次元ですら……計らせて貰えないほど上手ね

ラウラが隊長を務める“シュヴァルツェ・ハーゼ”女副隊長。クラリッサは眼下に広がるオペレーター達の様子を冷めた目で見やる

その膝に愛しき自らの隊長であり、護るべき少女を横たえた姿のま
まに

現行の状況。一夏とラウラの模擬戦とつ於ける各種データに狂喜乱舞していた者達は

早速データを検証及び整理へと着手しようとするも……モニターにデカデカと現れたデフォルメのウサギ耳が出現してからは

阿鼻叫喚の地獄絵図。まあ……慌てふためく彼らにとっては

「うっ……」

「！お目覚めですか？隊長」

意識を失っていたラウラが目を覚ましたのに気づき優しく声をかける

一夏から受け取ってからこのかた……ISの性能を無駄にフル活用してバイタルチェックで無事は確認取れている

まあ……そういうことで自身で看病するのを優先した為に現在、ラウラとクラリッサはオペレーター室内の隅っこで二人

喧騒とは無縁の空気で言葉を交わす

「副長……………あの男は？」

「もう、旅立ちました。予定が詰まっているのは訪れる前から仰っていましたので」

「そうか…………」

呟いてそのままにラウラは目の前のモニターに映る…デフォルメウサギとは別に、現在進行形で消えていくデータ類の中

そのモニターの一枚に映る。自身を抱いて、ミサイルの群れの中で少年と大人を分割したような笑みを浮かべ口元歪ませる少年を見据える

「副長」

「はい」

「娶りにいくぞ。補佐^{フォロー}を頼む」

その姿は弱弱しく見えるが…纏う空気だけは威風堂々としたラウラは宣言し

「お任せを」

日本の少女マンガの大ファンという側面を持つ

副隊長は愛しき少女の為、手にした間違った日本の知識をフルにイ
かしていくのであった

セシリア・オルコット 上

—GB 海商都市リヴァプール

——ん……此処の人達や…胃袋が頑丈らしいってことは理解できやしたな…

露天商から買った所謂、フィッシュ&チップス。白身魚のフライとポテトを食い歩きながらに

一夏はそんな事を思う

さて…現在、一夏が居る場所は——正式名称、United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland

如何せん、イギリスという国の名所。リヴァプール

かのユネスコの世界遺産に登録された美しき港町の一画を持つ都市であり

——しかし、ISは本当に便利な物ですな…

そんな異国において一夏一人が好き勝手動けて会話に困らないのも…ISの自動翻訳システムのおかげ

まあ…その恩恵を受ける者入れば、とばかり——勝手に市街へと

繰り出した一夏を探索する羽目になった真耶——を受ける者も居るが…

現状、一夏は今一度…ISという代物に対しての便利性を理解し…
街中を散策する

——ふーむ…一度はビー。ルズの発祥地を拝んで見たいと思っ
ちやいましたが…こつ、感慨ってモノには縁がないみたいですな、あたし私や
近くを走る水路にを沿うように視線を進めると

——夜景ならば、尚よし…と普通は言っんでしょうがね…

どうにもこうにも、気分転換に繰り出したはいいがイマイチな状況に

——チンピラが如きにや…文学も美術も理解できやしないと

見切りをつけて…この地での相互評価試験。様は一夏のデータ採
取を目的とした模擬戦闘が行われる予定の

アリーナへと向かおうと——裏通りから表通りへと出ようとする
刹那

「きゃっ?!」

「つと…こいつは失礼」

出会い頭に衝突。一夏はのんびりとした歩調で歩いていた物の…海
外に多い路地裏の細さが仇となって

急いでいたのであろう…豪奢で豊かな金髪を蒼いカチューシャで止めた年頃が同じぐらいの少女は前方不注意によって

「もう！淑女にこんな姿を晒させるなんて…」

一夏の謝罪を受け取る事もせず、ぶつくさと言いながらに少女は立ち上がり

「私、急いでいますの。極東のお猿さんを相手にしている暇はなくて」

相当イラついているのであろうか？たかだか、ぶつかっただけで盛大にバッシングを浴びせて

足早に駆け出す。肩をイラつかせて足取りも大幅。茶色のブーツは石畳を踏み鳴らさんばかりの勢いで振られる姿に

「カルシウム…足りてないんでしょうかね…？」

侮蔑をものとし…というより前回は色濃く残っている一夏にとっては

そんなモノは意識するべき事ではなく、むしろ息せき切って怒りを露にする少女を逆に哀れむという感じに

暫し、そんな少女を見やりつつも

——私^{あたし}も向かわなきゃなりませんかな

思い起こして、少女が去った先へと進行方向を向ける。その先に――

——彼が目指す施設があるのだから

そうしてブラブラと所在無さげに、元来の根無し草的な部分も相まって街中の軒並みをつぶさに見やりながら

歩いていくと……

——おや？…先のお嬢さんじゃありませんかい

目につくのマンホールの取っ手にブーツの踵、低めのヒール状になっている部分を捕られて

顔を真つ赤にしつつブーツを引き抜こうと悪戦苦闘する先の少女を見つける

が、其処は一夏。気に留めるも関係ないとその横を通り過ぎようとするも——

「ちよつと？！淑女^{レディ}が困っているというのに素通りですの？！英国紳士の風上にも置けない男ですわね？！」

叫ぶように声高に呼び止めてくる。若干、涙目なのがソソるような足を捕られて少女座りを余儀なくされた少女に

「いや、私^{あたし}や英国紳士じゃありませんし……」

「ちよつ？！普通はか弱き淑女^{レディ}が困ってましたら男性ならば、助けるのが筋でございましょう？！」

「いや、私^{あたし}やお猿らしいですし……」

「げ……。あ、貴方先ほどの……」

ああ言えばこう言う具合な的に会話を交わす少女と一夏であったが……最後に返した一言に少女としてどうだ？という声音で呻いた後

恐る恐る……マンホールに釘付けになっていた視線を確りと一夏の方へと移し

「あ、あははは……」

乾いた笑いを上げるかのように涙目のままにこちらを見つめる少女
流石に……先ほどの物言いは不躰過ぎる事を自覚しているのであろう
ガツクリと肩を落として

「……………お気に入りでしたのですが」

未練を断ち切るかのように肅々とした諦観のつまった声音で少女は
ブーツを脱ぎだす

「素足で行くおつもりですかい？」

「ええ！そうですわよ！！どっかの誰かさんが予定外の訪問となり
まして、私！わたくし今までの人生の中で一番急いでおりますの！」

そうして、傍目にも判るほどに悔しそうな顔でブーツを固定してい
る帯を外していく。目には本当に薄っすらと――

「……そんなに大切な物ですかい？」

「ええ！ええ！見ず知らずの男に対してでも胸張って言い切れますわ！お父様とお母様が最後に贈ってくれたプレゼントでありますもの！」

最早、感情の揺れ幅が大きくなりすぎて絶叫にも等しい声音で言い切る

その表情と瞳が浮かべる真摯な想いは——織斑一夏の、雪車町一蔵の大好きな感情。一生懸命。……ソレが宿す感情に似ているからこそ

中空にて手を一振りする。現れるは——

「あ、あなた？！」

少女にとっては見慣れた光景。量子化された装備を召喚する動作。けれど——彼女は見たことが無い

男性がその動作を行うところを

「失礼」

その一言告げて、召喚した兵装。フォールディングナイフ……と言ってもIS戦闘に耐えられる性能を持たされた物で

マンホールの取っ手を切断する

「あ……」

「お急ぎなんでしょう？早く行かなくていいんですかい？」

「え…あ…その、ありがとうございますわ…」

引っかかっていたブーツが開放されるも一夏の行動に呆然と見つめて固まってしまっており

一夏が催促する事によって意識を取り戻し、詰まりながらも礼を述べて足早に去る

——丸くなっちまりましたね…あたし私も

頭を掻きつつ…此方へと振り返り振り返りしながら走り去る少女を見送ってから

斬ったマンホールの取っ手を——当てる。再生するかのごとくに…
…ソレは見事に元通りとなった

走っているからだ

———そうに決まっておりますわ

息が切れそうなほどに走っているからこそだ

この胸の高鳴りは

実際に…息が切れ始め、肩で吸う様に呼吸を整えながらも

足早に歩く。金髪の少女は

まるで…何かを振り払うかのように

「ええ！そうに決まっておりますわ！！！！」

アリーナの更衣室へと辿る廊下で盛大にそう宣言する

周りを歩いてた者達が突然の叫びにドン引きするのも目に入らないぐらいに

———セシリア・オルコットは真っ赤になった頬を晒しながらに歩いていく

セシリア・オルコット 下

ーリヴァプール IS専用アリーナ 女子更衣室

勘違いであった

ソレは更衣室に入り、走ってきたおかげで流れ出してきた汗を拭い去る為に…シャワー室へと入った時に

——どうして

最早、走ってきたことによる息切れなど…当の昔に収まっているはず

だが、現実、セシリアの胸は

チラつく。先の光景が——

音を立つ。二つ

一つは拳。硬く握り締めすぎて白くなり、ずっと浴びている暑いシヤワーによって指先がふやけても

色艶も、その細長い腕と指が織り成すコントラストが崩れることがない手が……タイルの壁を叩く

もう一つは——

「鳴り……止んでくださいまし……」

シャワーの音に掻き消されそうなほどに弱弱しく

されど、表情は浴びる熱い湯によってではない

苦悶と憂いによって鮮やかに彩られる。己の表情と同じ音色を刻む

ワインディング・ハート
心の鼓動

ギュッと瞳を閉じ、拳を胸元にやる

ーリヴァプール IS専用アリーナ 格納庫

第二世代機。 “打鉄”

日本国が生み出した第二世代近・中距離重視型全領域対応IS

その無骨な武者姿に譬えられる。無機質で硬質な印象を与える甲冑に袖を通す

「いいですか？ いーちゃん。もう、予備で戦闘稼動が行えるのはソレ一機だけなんです。大事に使ってくださいね？」

真耶が困り顔にて一夏へとメツという感じに注意を促す

「へ、へ。まあ、気をつけられるだけ、気をつけまさあ…」

「もう！全力稼働したらISの方が持たないってどういう体をして
いるんですか…」

陰鬱な表情のままに肩を落として溜息を吐く。千冬にしろ、一夏に
しろ…どうしてこう

「私の周りの人は非常識な人ばかりなんではようか…？」

神様、私、何かしましたか？と薄暗い照明しかない格納庫内の天井
を見上げながらに呟く

「力力…。ご愁傷様で」

「…一端であるいーちゃんに言われたくない」

陽気に答えた一夏に対して、ジト目で軽く睨みつける真耶だが…
高校生とも間違えられるほどの童顔で迫力など微塵も無く

「可愛いお顔が台無しですぜ？マーヤ嬢ちゃん。眉間に皺を寄せる
のは」

そんな真耶の反応に、一夏は眉間に“打鉄”の鋼鉄の長い爪状の人
差し指を軽く押し当てる

「ひゃう?!?!あwっわあわわ?!?!」

「力力。そう在ってくださいえな…かえるばしよがない根無し草と言えども、あたし今の私にや

あ……貴方が居る場所だけが帰る場所なんですね……」

降ろす。その童顔なれど整った鼻筋を伝うように指を下ろし

ふつくらとした唇へと指を乗せて告げる。愁いを帯びた眼差しで

「?!?!?!?!」

「カッカカカ。もう少し……男に免疫を持たないといけやせんぜ?
あたし私みたいなチンピラに引つかからんようにね」

最早、言葉を発する事も出来ないほどに茹で上がった真耶へと忠告
めいた笑いを上げて

「と、言っても……この業界おんなじよたいじゃあ、土台無理、と」

小さく最後は呟くように告げる。そんな二人に管制室より

「あ、IS委員会所属。お、織斑一夏さん、カタパルトへと願いま
す」

女性の管制官の上ずった声音が一夏を案内する

「おっと……丸見えですかい?コイツは失礼をば」

陽気にその言葉を残して——一夏は飛び立つ

「その、せ、せんせいではければ……いーちゃんがいいっていうなら

……い、いつでも」

何が何時でもなのか？それは真耶にしか分からないが……彼女は一夏が飛び立っていったという事実も知らぬままに

身悶えながらに頬を上気して、瞳を閉じて乙女表情で呟いたとさ……

カタパルトの電磁加速リニアアクセルに乗って一夏と“打鉄”はアリーナへと飛び立つ

武装は全て、量子化状態の無手のままに中空へと身を泳がしていく
PICが齎あたらす頼りない感覚。素肌が風を切っていくのは心地良いものの

——こう、ね。どうにも……私あたしは好きになれませんか……。この感覚は強引に切り裂くような風切り音の方が一夏には懐かしくもあり、新鮮な面持ちで回顧する

そうして、一夏が周りへと視線やり始めた時——

相手方のカタパルトに火が灯り……蒼いシルエットが飛び出してくる。その蒼い姿は一夏の対面へと一気に位置すると

「あ、な……」

「おや、おや……三度目の正直とでも言いますかい？こりゃ……また奇

縁という奴ですな」

「……そうですね。あの時の量子解除パッケージ・アウトの時には分かっていたものですわ」

背部に四つのスラスタ。脚部ユニットが他の走行パーツより肥大化されており

彼女は構える。量子化を解いた自機、“蒼い雫。《ブルー・ティアーズ》”の最大火力を誇る大口径素粒子狙撃砲——スターライトmkIIII

その青と白のコントラストが奏でる…星を穿つ魔砲を構えながらに

「名を——聞かせてもらえませんか？」

IS間のコアネットワーク経由から響く。耳元に囁くような甘く切なさを含めた声音が震える

憂いを帯びた瞳。潤んで、その小さな眼まなこ。愛機と同じ名で見つめる

されど——体は油断無く戦闘態勢バトルスタンス

乙女としての顔と戦フルキューレ乙女としての顔。

恋も知らない純情を胸に抱え、焦がれる乙女と闘う乙女としての湧き上がる闘争心の狭間で揺れ動く——一人の少女が

一心に一夏を見つめ続ける。瞳は求めを、腕に抱えし砲身は拒絶を

相反する感情が本能のままに――

「一夏。一つの夏と書いて一夏……あたし私や、織斑一夏と申しまして…」

向けられる瞳に…頭を掻きながらに蒼天を見上げる。憎らしいぐら
いに真つ青な空を見上げ、瞳を一度閉じ

観念したかのような面持ちで一夏は告げる。――直向に向き合う
少女の表情こそ、己がもっとも愛して止まない姿なのだから

一見した態度は、とても褒められたような態度ではない。だが――
瞳に宿る色合いは

「――Itika…いち…か。イ…チカ。一夏」

「へえ、中々。日本語は初めてでありやせんのかい？」

無手のままに気負うことなく、一夏は問う

ISに搭載された翻訳機能から生じた言葉ではない。生の音声を描
き出すたどどしい日本語

Queen's Englishから始まり、ローマ……一句一句、
言霊を宿すように――魂と懸命を込めるように

その柔らかかにしてふくらな薄いローズのリップを付けた唇が、奏
でる。一秒でも早く、その名が馴染む様に

自然と発音できるように――ただ、何の苦勞も厭わずに……欲す
る者を――

「……少々、機会がありまして、ですわ」

虚勢を張る。いと可愛らしい程のささやかな反発

心と瞳は素直に求めるのに——体という名の理性は唇を尖らして、
高飛車を演じる

プライドが邪魔をする…

「ですかい。……そろそろ、始めますかい？」

無手の手に長刀を現出させる。肩にリズムよく当てながらに問いかける

アリーナの中央で何時までも会話をさせておけるほどに——スケ
ジュールと現地の欲の皮が突っ張った者達は待つてはくれない

ISという世界は…表の華やかさとは無縁と言えるほどに、裏は大
人達の都合と覇権を争う生臭い世界

「ええ。わたくし私の“蒼い雫”の鎧と化しなさい！」

氣勢を上げて、ブルー・ティアーズの背部ユニットの四機のスラストー。その末端部から四機の子機を飛ばす

BT兵器。操者の意思を反映し自由自在に空を飛び回る銃器。全領
域全方位稼動型兵装

セシリアの意思を反映し、飛魚の如くに跳ねながら一夏の元へと迫る
右頭上後方へと一機、左腹部側へと一機、正面頭上の額へと狙いを
定めたのが一機、そして後方左肩部へと回ったのが一機

本体たるセシリア機。ブルー・ティアーズの推進ユニットの一部を
担う子機——本体と同じブルー・ティアーズの名を冠された

「行きなさい！！私^{わたくし}の涙達よ！！」

号令たる張りのある掛け声が響く。打ち倒す意気込みとは反対の言
い知れぬ切なさが入り混じる声音が…

この一連の動作に掛かった時間は約8秒。実験色の強い兵装。BT
兵器の運用が未だ試験段階を越えていない現在で

その時間はかなりの早さであるが——実戦。命を懸けた双輪懸の
刹那が分ける節目とは比べ物にならない位に

——遅い

発射。発射。発射。発射。——回避

四機同時攻撃、射角も同一線上にならないように配置されている為
に子機が同時発射しても、お互いへと当たらないように

死角から攻撃であり、正面からの牽制でもあり、本命

つまるところ、必勝の攻撃方法であり——この方法でしか勝つ手段がないと言っても過言ではないブルー・ティアーズの戦法も

歴戦の操者相手には——余りにも拙い

「ひっ、へっっへ、……私に当てるのにどれだけ掛かりますかね？」

自機へと迫った粒子。同時四方向から飛来するビームの粒子を意図も容易く回避する

否——放った時には、最早離脱していた。瞬時加速を何の予備動作も無く

肩にリズムよく刀型近接ブレードを当てている姿を掻き消すように——その姿はセシリアの耳元で囁かれる

「?!」

「さて……頑張ってくださいな。私の仕事の内に入るんでしょうが……当たってやるのは失礼にあたりやすでしょうに」

「言われなくも!!」

低い呻きのような笑い声を残して、再度身を踊りださせる一夏を追う子機。ブルー・ティアーズ達……蒼き涙達の零す粒子の最中を泳ぐように避け続け

「一機一機に意識を傾けては意味がありやしない。もっと、三次元

に——十が一であり、一が十であるように」

青白い軌跡が追いついてるように迫る中を、優雅に舞う

「全てが一個の群体であるように認識を変えなければ——」

コア・ネットワーク越しに語る。一片の緊張も焦りもない、淡々とした声音で語る

片手に量子化を解いた太刀が現れ——一夏は薙ぎ払う様に投げ飛ばす。

太刀の柄に繋がった単分子ワイヤーによって一夏の片手を基点として——子機達よりも早い速度で旋回し

叩き落す。四機中、三機の蒼い涙達を

「?!?!?!!なら、これで!!」

脚部の前方へと配置された二本のスラスタの先。それもブルーテイアーズの姉妹達であり

先端の部分は——ミサイルを蓄えたタイプ。噴煙を発して高速に快速を求められた空対空ミサイルを発射する

量産機ならでは……各国に知らされている《打鉄》の主兵装たる刀型近接ブレードに手を取られている一夏へと

手を取られているように見せかけた一夏へと

口元が歪む。面白いぐらいに引っかかってくれる

未だ——戦士としては幼い少女達は盛大に愚直であり、真っ直ぐある故に

ワイヤーを切る。手放した武器に一瞥もくれずに

引っ張り出す。フォールディングナイフを二本

高速で飛来する二基のミサイルへと投げ放つ。——迫り来る爆煙をモノともしないままに駆け抜け

「高速で迫るミサイルを——投げナイフで落としましたの?!?!」

「…叫びを上げてる暇はありませんぜ?」

セシリアの悲鳴じみた叫び声を、肉声で聞き取りながらに仕掛ける

「きゃっ?!」

「力力……お綺麗な顔でありまして」

“打鉄”の肩部装甲を前面に出しての体当たり

肉薄した体勢は、一夏にセシリアの頬に触れるほどの余裕を与え

「?!?!?!?!」

「どういつにも…こう、私^{あたし}や心配になりやすね…敵^{あたし}ですぜ？私は」

顔を真っ赤にして硬直してしまう。瞳は潤み…紅葉が差す頬

思わず、嘆息してしまう一夏は

「——はあ……受領したばかりで？」

「な、なぜソレを？！」

「——まあ、運用を見ていれば…でしてね」

嘆息するようにボヤキ…

「というよりもですぜ……少しは手を叩^{はた}くか、どうかのアクションを起こしてもらいたいんですがね……」

体勢は肩部ユニットを押し当ててからの懐への潜り込み

故に——セシリアの頬へと遣った掌が赤く火照った頬の熱を伝える

整った容姿。白磁の肌、瑞々しい潤いを持っており、全体的に丸みのある小顔を至近で覗き込む姿

「あっ…っ…」

一夏の言葉を耳に入れても…真っ赤なまま固まり続けるセシリアに後頭部を搔いて、どうしたものかと思ひ出す一夏に

「——評価試験終了。いーちゃん、直ぐに戻ってきてください」

「……………何か、ありましたかい？」

ドスを効かせて、アリーナに設置されたスピーカーから真耶の聲が流れる

嫌な雰囲気に一夏が気乗りしない声音でコア・ネットワーク越しにアリーナの管制室へと連絡を入れると

「試験になりやしない。と言う事ですよ」

イイ笑顔で答えてくれる真耶。その後ろには…………溜息を洩らしながらに項垂れた姿の現地のイギリスの技術者達の姿

果たして、ソレはどちらの意味で告げられた言葉なのか？

目前のセシリアの表情と真耶の表情を見比べ、真耶の背後の者達を一瞥した後

「^{あたし}私や、ほんとに……………なんで、こんな場所に居るんでしょうかね〜
〜……………」

真っ 青な空が憎らしいぐらいに羨む

とりあえず、この場から逃げ出したいー夏であり…

「にしても……いい所のお嬢さんであるんでしょう？なぜに徒歩で向かってらしたんで？」

「あっ……」

口に手を当てて……今、思いついたという表情を晒すセシリアであった…

シャルル・デュノア

― 輸送機内

「そう…拗ねないでくれませんかね？」

機内席の窓際に座った一夏は疲れた声音で

「うつうつ…!!」

隣に座る真耶の膨れっ面を横目に囁くように吐き出す

時はセシリアとの一戦が終わり、次なる招聘国へと向かっている旅路の途中

あの一戦が終わってから、このかた……山田真耶女史の機嫌が急降下を辿る一方であり

「……そりゃ、マ―ヤ嬢ちゃんを置いて招待されたことには…あたし私の不備もありますがね…」

疲れ切った声音で尚も紡ぐ一夏

「一応、建前上はマ―ヤ嬢ちゃんはスタッフなんですから……」

「……嬉しそうだった」

しかし、一夏の言い訳じみた言葉を遮り

「なにを、ですかい？」

「いーちゃん。オルコットさんのお誘い、鼻の下伸ばして受けてた……」

大きな胸を抱えるように人差し指と人差し指を突きあつてのイジケ

一体、何歳だ？あんたは……という思いを胸に閉まつて一夏は

「そりゃ……あたし私も男ですからね。見目麗しく、あたし私の好みの方の誘いな
ら喜んで行きますがな」

好みの部分に関しては人格形成の半分。雪車町一蔵からの引継ぎで
あり

老若男女関係ないというニュアンスを含めて一夏は話すも

この状況で、相手の女性にソレを期待するのはナンセンスであり……
その点に関しては年端のおりむらいちかいかない若造らしい

益々、膨れっ面になり……膝を抱えて座り込む始末

「……マーヤ嬢ちゃん」

「……好み。いーちゃん、私のこと好みって言った癖に……」

「そりゃ、言いましたがね……あたし私の好みの意味分かって言ってるやすかい？」

一夏の言葉に対して……どんよりとした瞳で見つめてくる真耶

膝を抱えて視線だけで見つめてくる故に——童顔でおっとりとした雰囲気は掻き消され……一夏へと訴えてくる

その姿に大きく息を吐き、窓辺から見える雲を見据えながらに

「……貸し一つ。ってことで勘弁してもらえませんかね？」

「……いいよ。でも千冬先輩には内緒だよ？」

——姉^{あね}さん相手に……マーマ嬢ちゃんが隠し通せましたかね……？

隣でさっきまでの表情とは打って変わって、取らぬ狸の皮算用を始める真耶

瞳がキラキラと輝いており、まさしく夢見る少女を具現化しているも——隣の一夏はそんな真耶の発言に首を傾げるのみ

織斑先輩。一夏の姉にして——第一回“モンドグロッソ”総合優勝者であり

元日本代表候補生たる山田真耶の現役時代の先輩兼、所属組織の上司

そうして——ある意味では、真耶の天敵。そも……一夏に対してある種の想いを抱く女性全ての天敵

「……はあ、前途多難ですな」

真耶の表情を見やり再び嘆息を吐いた一夏は、渡された資料

フランス代表候補生——シャルル・デュノアオープン・ブライバシーの開示情報に視線を走らせて

「ほんと……前途多難ですわ」

その資料に載る。性別——男でありながら、線の細い体。それを見つめて息を吐いた

——フランス　パリ

——……まさか、こんな所に通されますか……

一夏は周りを見渡しながらに心中で呟く

青々と生い茂った芝生達。庭先に立つ銅像は——かの自由の女神像の原型となったと言われる代物であり

ソレらを見渡せる位置に立つ建物の一室にて向かい合つは——

「御呼び立てしてすまないね。一夏・織斑君」

一夏の軽く7、8倍はかけ離れていそうな容貌でありながらに

明朗快活な口調。ハキハキとした声音は未だ中年を思わせる活力に満たされており

「滅相もありやせん。私^{あたし}みたいな手合いに御声をかけてもらえて至極、感激しておりますゆえ…」

恐縮した姿勢のままに、目前でゆったりとした一人がけのソファに座る老人へと帰す

慇懃に腰を折って礼を尽くす。目の前の老人は一夏の態度に満足なのか？朗らかに笑うのみ

……なぜ、このようになっているかと言えば…

フランス領へと辿り着き、現地のＩＳ委員会直属のビルへと赴いた折に政府経由で一夏招聘の要請があり

政治的利害が発生したのであろう。すんなりと一夏の招聘に応じた委員会の命のままに――

「さあ、立ったままなのもツライであろう？そちらへと掛けなさい」

老人はそう言っただけで対面のソファへと一夏へと指す

「…失礼いたしやす」

一礼してから進められるままに席に着く

「自己紹介がまだだったね。私はジャック。老い耄れジャックとでも名乗らしてもらいましょうか」

愉快そうに告げる。老人、ジャック

——試しているのですかいな……？しかし、齢15程度の小僧に一流の礼儀を求めるというのも些か…

思考するも、取り立てて礼を失する真似は犯しておらず

さりとして…口調を咎めるなら、最初に旅立つ前に通達が来るはず。この口調は大概の者達に対して使っているが故に

年が離れた物に対しては陰悪されているのは一夏も百も承知であり

「へえ……ジャック老と御呼びすればいいですかい？」

対面する老人が揶揄するような言葉を紡がないと言うのなら、最初の口調どおりに返すのみ

老人の自然な態度に恐縮しつつけるといいうのも相手を不快にさせる面もある

ソレと判断して一夏はそのままに紡ぐ

「ああ。それでいいよ…私は一夏君と呼ばせてもらうおつかな？」

「へえ。お好きに御呼び下さいやせ」

「では…一夏君。キミにね…折り入った願いがあるんだよ」

老人の破顔した笑顔を認識した瞬間

——こりゃ……メンドクサイことに巻き込まれましたかね……？

——アリーナ

フランス。IS業界においては取り立てて…目新しい代物が拝める国ではないものの

世界シェア第三位に位置するほどの工業力は

——高速切り替え（ラピッド・スイッチ）…ですかい

現在の量産型ISの基本。第二世代型のラファールを世に多く放出しており

眼前にて、数多の銃器兵装を量子化解除と量子化を同時にこなしながら

途切れる事の無い銃弾を浴びせてくる機体

第二世代型専用改良機——ラファール・リヴァイブ？

基本装備の一部を外した上で後付け装備用に拡張領域を原型機の2倍にまで追加しており、その搭載量は追加装備だけで20体

アサルトカノン“ガラム”、連装ショットガン“レイン・オブ・サタデイ”、近接ブレード“ブレット・スライサー”、重機関銃“デザート・フォックス”

等等…歩く武器格納庫としての機能を極めた一品

そのオレンジを主体にしたカラーリングを巧みに操るは

対外的には…世界で二番目に発見された男性IS操者。シャルル・デュノア

——しかし…

相対するその男の姿。どうにも覇気が無く、何処かしらに迷いが生じているのだろうか？

魅せる技の技量からしても……

——ここ最近…見つかったと言う話ですがね…

どう見繕っても——最近、現れた者ではありえない習熟度

高速切り替え（ラピッド・スイッチ）等、相当の訓練と搭乗時間を必要であり…絶対的に

——時間が足りやせんね。私が^{あたし}見つかった時等……真っ先に公表したというに

思案する。己が状況を考えて

当初、一夏の存在が見つかった折ですら……声高に日本国籍。元々が日本人で在る故に、日本政府が自国民として当然の如くに世話するのが当然

だが……事はISという。世界の軍事を根底から覆した代物。只でさえ……開発者が極東の島国の出であり

更には、世界初の男性IS操者などと……禁断の果実の存在までも認める訳にはいかない世界各国

特に——世界有数の先進国達は

——白人主義を豪語する輩を見れば……可笑しすぎるでしょうに

故に——極東の黄色猿イエロー・モンキーと揶揄されながらも、無国籍……という意味不明な国籍が生まれたのであり

——私あたしという存在を掻き消す為に、祭り上げたということであっているんでしょうが……

見据えるは眼下にてホバリング走行にて、アリーナを駆けずり回りながらに

手の中の銃器を色とりどりに変えながら

アリーナの観客席ほどの中空を踊り続ける一夏へと弾雨を浴びせ続けるシャルル・デュノア

委細合切の言葉を紡ぐことなく、ただ淡々と標的たる一夏へと戸惑い、葛藤を織り交ぜた視線のままに

——どうにも……いけ好かないですな

常の人を食った余裕の笑みを浮かべることなく

仏頂面を晒す。雪車町一蔵のままであれば……それこそ、内心で留めて処理する感情を

織斑一夏としてつけた二度目の生で構成してきている人格が、未だ……成人に満たない青臭い餓鬼のままに

——力力……。どうも、本当に私は丸くなっちまいましたね……
あたし

胸中と頬の筋肉の無意識の動きに、溜息混じりに思いつつ

——が、半端者相手にするのは……また、違うものでして

スツと瞳が細くなる

かつてを生きた時代の中で……一度見据えた男の最初の面持ち

嫌で、嫌で、仕方が無いという——悪鬼の面持ちに似た嫌悪感

——国が指示してるってのも……少し廻りゃしゃ……是非もありやしません

飛来する銃弾の数々

フルメタルジャケット、アーマーピアシング、フレンジブル
様々な弾丸が犇めき合うように襲い掛かる中を

——さて………問いますかね

悠然と空を泳ぎながらに一夏は唇を歪めた

シャルル・デュノア（後書き）

雪車町さんを知らないと最後の嫌悪感がさっぱりな点

シャルロット・デュノア

—アリーナ

相対する鋼鉄の武者

「けへ……存外に器用なお人で……」

人を食ったような笑みを浮かべて

彼——いや、彼女。シャルル・デュノアが思うは……

——これが……！世界唯一のIS操者の実力……！！

刀型近接ブレード一本だけで、数多の弾雨を軽く越えてくる姿に

愛人の子として生まれたシャルルは内心で焦りに似た感情を抱えて

その、渋い表情を見せる端正な顔を歪める

実の母と死別し……身寄りのなかったシャルルを引き取ったのは——

——シャルルが生まれてから母が存命中に一度も会いに来てくれなかった

父。父と言う記号を持つ遺伝子提供者の男

実しやかな愛は無かったのであろう。母にも、そして行動からして

シャルルにも

身寄りが無く、そのまま孤児院に世話になるはずであった物の……
その身に流れる血筋が

男にシャルルを仕方なしに引き取らせることになったのであろう

幾ら、片田舎に押し込めたところで……噂に戸口は立てられない

押しやった片田舎でもその話は伝わっており——世界有数企業の
一画を連ねるデュノア社の社長が

本妻に子も生まさずに、愛妾に生ませたとあれば……世間の陰険と矛盾
先が向かうのは必定

故に……炎となる前に火種^{シャルル}を回収して——自社のISテストパイ
ロットに押し込めた

——この至近距離でフランジブル^{さんだん}弾を回避するって……！

右。やや上方、シャルルからの角度にしてみれば60度といった場
所から近接してこようとした一夏を

その装備の都合上……シャルルの近く中距離の射撃戦闘対一夏の超近
距離剣戟戦闘では

——懐に入られたら……終わっちゃうよ！！

申し訳程度に積まれたスライサー程度で……どう足掻いても、天と
地程の実力差を持つ一夏の斬戟など……持って一合か二合

故に、兆弾性能を凝らした屋内戦闘向けの弾丸。フランジブル弾を積んだ

連装ショットガン“レイン・オブ・サタデー”

その二つの雨を降らせる口穴を我武者羅にばら撒くしかなく

「きひ……中々に無茶をされるのもので？」

兆弾性能を殺いでいるからといって……散弾銃をぶっ放しているのに変わりなく

「無茶しなきや……！キミの間合いに入っちゃうからね……！」

苦し紛れに放った牽制で一夏は瞬間加速を活用して間合いを遠のけるも……

シャルルの言葉の色合いの中には、未だ苦渋が滲み続ける。綱渡りな戦いなのが否が応でも

——これじゃ……灰色の鱗殻なんて、ただの杭打ち機だよ……！

肌で感じる

「……それにしたって！さっきの攻防！」

すかさず、中距離へと詰め寄り……二丁のアサルトライフルで押さえ込むように

ホバリング走行を開始したシャルルが語尾を荒げながらに紡ぎだす

「押し切れば、ソッチの勝ちだった！……手加減のつもり？！」

被弾覚悟ならば、確実にそうなっていた。そう……なっているはずだ

シャルの言葉に一夏は、口元を歪め……目尻を下げながらに

「へ、へ、へ……いや、なにね」

一夏が言葉を紡ぐ間もシャルルは押さえ込もうと中距離をサイドステップ感覚に機体を揺らして、間合いをとる

対する一夏は、付かず離れず。シャルルが放つ銃弾と戯れるように踊る

「確かめたかったんで……」

声音は冷え切っていた。紡がれた声音は完璧に

「何を?!?!」

「けえっええっええヶけけっけ！ひえええっえええへへへへへへへ
！！」

「ッ……嫌な、晒いだね……」

盛大な奇声が響く。一夏とシャルの間に、絶え間なく響き渡る銃声によって二人の間にしか分からず

その笑いに気分を害したシャルが表情を歪めて、さらにアサルトライフルにかける人差し指に力を込める

一夏のその態度に対する怒りと――積み重なってきた怒りへと

「たいした……人形様^{おじょう}ぶりで……」

侮蔑が籠った言葉は…シャルに響かず。自身の口の中だけで発される
そうするつもりが――

「キミ?!?!知ってる?!くっ……!僕だって、僕だって!!!」

発された言葉の額面^{ルビ}上のままに受けとったシャル

表情が驚きに占領され…次いで、瞼の端に小さな水滴が一瞬だけが
浮かび上がる

「キミに……何が分かるんだ!!!」

「いやいや……見た格好そのまま。と、しか解釈できませんねえ…

……」

「バカにしてるの?!」

「いやはや…なんとも」

「バカにしてるでしょ!!!……!!!」

「こりゃ……また……私が苛めっ子って訳ですかい？」

「そうでしょ!!!」

シャルが激化し、一夏と言いつ争いになっているまも…両機のISは立ち位置を変え、滑るように舞い続ける

怒りが？き出しになつていく。蓄えられた…理不尽と流されるしかない生き様故に…蓄えられた怒りが

咆哮となつて一夏へと牙を？く

往々に、**猛**^{たけ}だけしく、**凄**まじく

その、少女の怒りを、無情の怒りを

「ヘッヘエ……へ、へへへへ！ やっぱ、餓鬼だ！！ 覚悟が足りねえ
おじょうちゃん
！！ 意思が足りねえ！！」

侮蔑、嘲笑、愚弄の叫びが木霊して返す

「何が……！何が足りないって言うんだ！！！」

自身の怒りの感情に囚われ、一夏の紡ぐ言葉の魔力に囚われ

き出しの感情と想いのままに吠えて問い返す

「いやあ……なに、お嬢ちゃんがね、くっだらない半端者だって事で

すよ」

またも…シャルルは額面^{ルビ}通りに受け取る

半端者。ソレが指す言葉が、女でありながら……男の格好をしていることを指摘していると思っ

さらに激化して、言葉を荒げて紡ぐとするも

「嫌なだらうお？ 男の格好をするのが――」

淡々とした声音でありながら…怒気が籠った言葉を封じ込めて紡ぐ

「嫌で、嫌で、たまんないんだろっ？」

それにシャルルは答える

「そうだよ！！嫌だよ！！こんなの！僕だって…僕だって、女の子だ！！」

搾り出すように告げる

「父さんに引き取られて……ISの訓練をさせられて、男として教育されて…！嫌じゃないわけ無いじゃないか！！」

「なら……なんで、逃げなかった（……………）？」

その一夏の言葉に体を一瞬をビクつかせた…シャルル。ソレを見逃す一夏ではなく

「お嬢ちゃん。世間の柵しがらみがあるのが……逃げ出す方法は幾らでもありやしただろう？」

知しっているからだ一夏は

ISの操者が一夏を除き、全てが女性のみ。されど軍事業界というものが未だ……男達の世界である故に

薬物、拷問、拉致、調教、洗脳。ありとあらゆる手段を講じて……IS適正を持つ女性を無理矢理支配下に置く時代があったのを

何時の時代も——女は男の道具。という愚劣を極めた考えを持つ男は居る。だからこそ——

江戸時代の日本にあった……縁切り寺曰く。各国に設置されたIS委員会の敷地内に自己意思で逃げ込んだIS適正者は

問答無用でIS委員会の保護下に置かれると言う事を、アラスカ条約に異例的に盛り込まれた法案を——

「ソレを行わず、さりとて……嫌だ、嫌だと……吠えるのみ。けけけ……嬢ちゃん。あんたはな——」

口元が酷く歪む。雪車町一蔵のように、下卑た笑みが込み上げる

心底、嫌いな——

「どっちでもねえ。男として生きると覚悟することもなく、逃げる意思も持たねえ！どっちつかずの半端野郎——」

罵声の如くに轟かせる。伏いてしまったシャルの肩が小刻みに揺れる

「黙れ…」

まるで…泣いているかのように

「くっだらねえっえっえっえ！…！ひゃひゃひゃひゃひゃひゃひあ！
！…」

まるで…怒りを溜め込むように

「黙れよ！お前えええ！…！…！…！…！…！…」

——くそ！くそ！くそくそくそくそくそ！…それが、できれば、
！！

思い起こす。昔の記憶

幼き日々、父が居らずとも……幸せそうにシャルと共に生きた母
の姿

時折……写真の中の父へと吐息を洩らす母の姿

——なんにも知らないくせに！！なんにも僕の事知らないくせに
！！

「織斑—夏ああっあああっああ—！！—！！—」

「き、へへ……半端者が半端者呼ばわりされると一丁前に腹を立てるらしい！」

激情が全てを動かす。不意に飛び上がる

アリーナの席位置の中空にて舞う一夏へと銃弾の雨を降らす為に

一夏が陣取るより上へと瞬間加速を無意識に発動させて

イグニッション・ブースト

態勢を取る。全射撃兵装を展開する

その姿——まさしく、歩く武器庫

構える。ターゲットスコープに一夏を捉える……引き金が絞られる

フルメタルジャケット、アーマーピアシング、フレンジブル

弾丸の雨達が重力と加速に導かれて——一夏の元へと直走る

中——

構えた太刀を這わせる

アリーナに籠る風の軌道に

風の呼吸に——

ラウラ・ボーデウィツヒに放った剣技とは違うも

かつて…雪車町一蔵が生きた世界の日本。大和において最も名が栄えた流派。一刀流

その最極意の一つ、一刀流五箇条の内の一つがあ——金翅鳥
王剣

ソレと共に伝わった残りの四つ。妙剣・絶妙剣・真剣——そして

「ひゃあ、ひいや、ヒヤアツアアアツア——！！」

バレル・ロール・エッジ
独妙剣

インメル・マントーン
金翅鳥王剣が失速領域内での

上昇速度が無になる刹那の、落下重力の発生を掴み成し遂げる剣技
とは違い

バインダー
方向翼を切るのと同じ。ただし、太刀という名の方向翼

まるで、太刀がオールのように水を、海を掻き分けて切り進むかの
ように

空という蒼い大気の海を泳ぐヒレのように——太刀が振られる

ロール ベジチアップ
横転と機首上げを同時に行う。横倒しの樽 バレル の内壁をなぞるように螺旋を描きながらに

跳ぶ……飛ぶ——

迫り来る。一夏

銃弾の雨を悠々と大海を進む鯨のように、自らの元へとやってくる刹那の中

——どうしたい？嬢ちゃんは…どうしたいんだ？

決して、雪車町 チンピラ 一蔵のままであれば絶対に紡がない言葉を紡ぎだす

——どうして、嫌嫌やってる？

絶対に紡がない言葉を紡ぎだす

——嫌だ、嫌だって体が言っている

コア・ネットワークを介して

——本当はこんなこと、したくないって本音が透けて見える。嫌ならやらなきゃいいだろうが？

シャルルのみに伝わる言葉で

——嬢ちゃんが、そうしなければ…会社が潰れちまうってんですかい？

コア・ネットワーク。シャルルの？き出しの傷ついた心が曝け出される空間で

——嬢ちゃんにしか救えない。でも、嬢ちゃんは男装メンズをしたくない。ってんなら

心が跳ね上がる

——見捨てちまえ。そんなもん

傷が跳ねる

——どっちだっていいんだ。見捨てようが救うおつが。ようは…

跳ねる

——嬢ちゃんがしたいのか、したくないのか？ソレだけだ。納得してたら

——泣いて怒りやしねえ。納得してねえから……ああ、なっちまう

——人間、みんな。自分のことしか分からねえ、分からねえから、自分のやりたい事を

—— てめえで考えて、てめえで納得して、やる

—— みんなそうやって、真面目に生きてらあ

—— お陰で世の中、面白れえ……。だから、私の好きな人たちが
見える

くすんだシャルルの心が見惚れる

—— 付き合ってみても、ぶつかってみても……。みんな生きること
に半端つてもんがねえからいい

泥臭い、少年のような笑み

—— どの時も、こいつも……。楽しい奴らだ

心底、其処に生きる者達が好き好きでたまらないという表情

ISという……。女性達が切磋琢磨し続ける場所で生きているからこそ

—— 嬢ちゃん。てめえだけだ

織斑チンピラ一夏なのだ

—— どうしたい？どうなりたい？

ポツリと言葉が洩れた

自然と、手にした銃と瞼の雫を力なく零しながらに

迫り来る一夏へと、弱弱しく手を差し出して

「たすけて……………一夏…」

シャルロット・デュノアは真っ赤にした目で告げる

最早、雪車町チンピラ一蔵ではない

「最初っから、そう言やいいんだ」

笑みが滴る。もがき苦しみながらも、前へと一生懸命に進みだした
女の子を

もう一度、記そう

織斑チンピラ一夏なのだ

鳳鈴音 上

― 輸送機内

ハンガーロック内にて怒声が響く

「いーちゃん！ー！」

訂正。怒声みたいな童顔の大人の女性の大声

「そう… カツカしてやすと小皺が増えますぜ？カルシウムでもお取りになりました」

装着したIS。第二世代型量産機“打鉄”の具合を確かめるように
ハイパーセンサーが統括する機体データへと視線を流しながらに―
夏は告げ

「ふざけないでー！丸一つ！管制塔をお陀仏にしたってのにー！」

管制塔

シャルロットとの評価試験最中における……シャルロットの助けに
求めて

「まだ、言いますかい……」

後頭部を掻きながらに嘆息しつつ肩を落として

「ありゃ、こう、アレですわ。自業自得……みたいな？」

「自業自得もへったくれもありません！！！！あんな――」

大きく息を吸う

その影響で自前の最大の特徴たる大きな胸が

より一層と協調されるように高くなっていき

「突っ込んだら壊れるに決まってるじゃないですか！！IS相手にコンクリートなんて紙切れ同然なんですよ？！」

一気に吐き出す

一息で言葉を紡ぎきり方を激しく上下する真耶

対する一夏は最初から真耶の行動を分かっており、言葉が発される直前で耳栓をしてシャットアウト

「建物が壊れただけで済んだんですから……御の字でしょう？」

掌を広げ、肩を竦めておどけた態度で言いながらも

「奴さんらにとっては」

瞳は一度も笑うことはない

「マ―ヤ嬢ちゃんも知ってるでしょうに？」

当たり前だ。織斑チンピラ一夏は雪車町チンピラ一蔵でもあるのだから

「一生懸命生きてる奴に……半端はんぱを強いる奴は」

こう返すに決まっている

「大嫌いだと」

「いーちゃん……」

一夏の言葉に真耶は肩を抱いて、切なそうに言葉を洩らす

「私あたしや……別に構いやしませんよ？私あたし自身がどうなるうとね？」

人を食ったような表情で紡ぐ

「世間様に齒向かった所で、真っ先におつ死ぬちのは眼に見えており
まさあ……」

あっけらかんとした声音で紡ぐ

「それに、そう悪かない生活ですぜ？なにせ……一番、おっかない
位置に立っていやすからね？おかげで」

ニタリと口元が歪む

「面白いモノがアッチからおいでなさる。存外、悪くない生活だ」

「いーちゃん…」

真耶の表情が歪むのを見て取りながらに

「そりゃ、最初は気に食わないでしたぜ？なんせ、こちら…静かに暮らしてたつてのに」

思い起こす。この新たな生を受けてからの記憶

対面に座す……己に脅えきった木刀を構えた胴衣を着た男

ソレが立つ側にて座っている“最初”の幼馴染と

自身が立つ側にて、制服姿で立ち尽くす織斑千冬の姿

“天災”との出会い。騒動へと巻き込まれる自身

ISとの会合。息つく間もなく戦いへ

ほんの微かな出来事しか思い出してないのに…

「次から次へと厄介事が押し寄せてきやがりますからね……」

疲れたという声音で溜息を吐くように肩の力を抜く

「いー…」

「ですがね。マ―ヤ嬢ちゃん」

真耶が潤んだ眼で一夏へと言葉を紡ごうとするも

一夏は真耶の唇へと人差し指を立ててくつつけて塞ぐ

第一関節から第三関節までの指の腹が湿った唇の熱を伝えてくる

「存外、悪くないんですよ。本当に」

その熱の心地よさに身を委ねるように一夏は瞳を閉じて

歌うように、吐き出すように、告げる

そうしてハイパーセンサーで精査していた自機のバイタルチェックが丁度完了し

「では、行ってきますわ……“天災”には貸し一つって伝えてくださいな」

「……直ぐに取り立てに来ると思うよ？」

「なに……どうせ、用件は分かってやす。ソレが早くなるか、遅くなるかの違いだけですから私的^{あたし}には踏み倒しているのと同じですの
で」

クツクツと下卑た含み笑いを上げ

ハンガーの機密をロックする。真耶の唇へと当てていた人差し指を離し…其処に防弾性も持たされた強化ガラスが二人を隔てて

機外へと落ちていく。自由落下の行き先は――

「いーちゃんのバカ……」

腰が碎け、床へと尻餅着いた真耶は…人差し指と中指の二本で唇を押さえて呟く

潤んだ瞳のままに

後日、デュノア社への襲撃事件を報じる記事が紙面を占めるも……

――大蓮　IS訓練所

「って！この話、私が主役じゃないの？！」
あたし

のっけからメタ発言をかますは…中国代表候補生にして

一夏の二人目の幼馴染。幼さを醸し出すツインテールは緑のリボンで纏められ

小さな背丈はさながら、更に強調するも……その烈火のような性格から

「うううう！！もう！どうせ、コレ！一夏が無茶したんでしょう！！」

優雅にランチタイムと洒落込んでいた事実など……吹き飛ばして

唾を盛大に飛ばしながらに剥れる。鳳鈴音

手にしていた新聞紙をテーブルの上へと叩きつけながらに

デュノア社襲撃事件の記事を突く。親の敵のように、其処に映るピルを睨みながらに

「世界三位のシェアを誇るデュノアが……襲撃者を放置なんてするもんですか……！」

巡る思考。巨大企業といっても差し障りの内程の規模を誇るデュノア社が

社の名前に汚名を被っているにも関わらず……犯人の特定ができていないと発表するからには

権力が動いたに違いないと、ソレも……桁違いの権力が動いたということ推測できるぐらいには――

「どういうことか……きっちり説明してもらっからね！！一夏！！！！」

ダイニングから見える寝室のベッド。その物置き場に置かれた

二人だけで撮った。一夏と鈴だけが映る写真立てへとガンを飛ばす鈴であつた…

が――

不意にアラームが鳴る。その音に肩を一度大きくビクつかせて鈴は油の切れたブリキのおもちゃのような仕草で首を

音の発生源へと向ける。鈴に似合っている緋色の携帯……鈴が恋焦がれる者からの初めてのプレゼント

「うがあああつあ……！」

乙女として、ソレはどうだという呻き声を上げて

「いっつつも！いっつつも！来る時は、本当に、唐突なんだからああああ……！！！！！！！！！！」

髪をややくしゃにしながらに吠え、寝室の鏡台へと飛び込む鈴

何時だって、女の子の支度というモノは時間が掛かるものだから…

輸送機のタラップから直接下りて、空港内に入る事もせずに一夏は
燦々と降り注ぐ太陽の中

—— 此処に…来るのも三回目ですかい

そんなことを思いつつ、空を見上げる。日差し避けに手を額に翳し
ながらに

少し、離れたところで真耶が担当官となにやら打ち合っているの
を見やりながらに一夏は

—— しかし…：…毎度、思いますかね

視線を周りへと移していくと

—— 珍獣じゃ…：ありやせんのだがね

ISという代物性質上——どうしても現場も技術者も女性が上位
となり、必然的に職場内の人員もそれを反映して

女性ばかりになりやすいのは押してしかるべし。なのだが…

—— 男日照りって奴もあるでしょうがね

最近、とみに溜息を吐くのが日課となっていると自覚しているものの

—— こんな、チンピラ相手に触手が動くようじゃあ…：…世も末と
いう奴でさあな…

思わず、糸目になつて得度も無い事を思う

視線を向けた先に屯する。色取り取りの女性達

一夏と視線が合ったという勘違いを起して、真っ赤になつて伏せてしまう者

調子に乗つて手を振る者

彼女達が居る場所へと手招きする者

10代、20代。背が高い、低い。細い子、太めの子

本当に選り取り見取りな女性陣達が一心に一夏へと視線を送る中

「いーちゃん。搬入が開始されたから戻っていいよ？」

真耶がそんな女性陣を封殺するように、一夏へとやって来て視界を塞ぐ。無意識的に

我が弱く奥手の彼女であるが……ソレでも大人の女性であり、恋する乙女であるが故に

「いや、あたし私^{あたし}や待つてゐる人が居ますからね……此処に居ますわ」

そんな真耶の想いとは裏腹に一夏は陽気に答え

「イーーーーーちーーーーーかああっああっあ!!!!!!!!!!」

遠くから怨念の呻きのような叫びが近ずいて来るのを

「へ、へ………来やしたかね？」

「リンネ鈴音の嬢ちゃん」

少し、瞳が緩んでいた

鳳鈴音 上（後書き）

最後のルビは誤字にあらず

鳳鈴音 中

―大蓮

「あによ……ジロジロ見て…！」

上目遣いに見ながらに、その小柄な体には不釣り合いな程に大きな井を抱えた鈴

その瞳はジトツとした三白眼のままに睨む姿を見やりながらに

自身の前に置かれた井。二人ともに坦坦麵が満たされたソレへと視線を戻しつつ

「…ひき肉が口元についてやすぜ？」

人差し指は鈴の頬へと伸びて、指摘した茶色の物体を拾い上げて口に含む

「うつつつさいわよ?!ボケえええ!!!」

一夏に指摘された瞬間にヤカンのように湯気を一気に噴出しながらに

赤面したまま怒鳴り散らすように文句を言う鈴

抱えた井の汁を飲む形で…真っ赤になった顔を隠す

「あゝあゝ……そうがつついたら」

鈴のその様子に一夏がめんどくさそうに声を上げて

「げっほ?! げっほっ!!」

「ほら、言わんこっちゃない……大丈夫ですかい? リンネの嬢ちゃん」

背中を擦ってやりながらに一夏はカウンターに置かれたティッシュを拝借して鈴の口元を拭ってやる

さて、場所はもう分かるだろうが…食堂の一角。カウンター席に二人並んで食事を取るは

世界唯一の男性IS操者。織斑一夏

中国代表候補生。鳳鈴音

小学校低学年からの付き合い。俗に言う幼馴染という

「って!! また、アンタは!! 私^{あたし}の名前は鳳^{フアン}! 鈴音^{リンイン}!」

差し出された自身の口元を拭う手を払いのけることもせずに

逆に成すがままに受け入れて……うにゅうにゅという擬音が付きそうなほどに許していた鈴であるが…

「リンネなんて名前じゃないっての!!」

一夏の最後の呼び方にツインテールを逆立たせて、肩を怒らせながらに吠える

「いいじゃないですかい？軽く……5、6年以上はソレで通しているんですぜ？」

「アンタがそんなだから！あたし私が名前間違っあたして覚えたからでしょうが？！」

「いや、お国読みで通じないと思って聞いてきて——」

クツクツと笑いを耐えながらに

「バカ正直にソレを信じちまう。鈴音リンネの嬢ちゃんの可愛さに負けちまいやして……」

今にも噴出しそうな一夏とは対称的に

「きいいいい！！ムカツクうつうう！！！！しかも、変な時に可愛いなんか使うから……！余計にム力つく！」

地団駄を踏む鈴は更に眼光を鋭くして

「それに！いい加減に嬢ちゃんはやめなさいよ！！」

ビシツと人差し指を指して

「アンタと私はあたし同い年でしょうが！嬢ちゃんなんて呼び方は嫌なのよ！」

「と、言いまして……コレは私の性分あたしなんですかね……？」

「性分もヘツタくれもないわよ！だっ たら……」

「だっ たら？」

「鈴音リンネって呼ぶか、嬢ちゃんって呼ぶか……どっちか一つに絞りなさい。でなきゃ……」

腕を組み、瞳を怪しく光らせ脅すように告げる鈴に対して

—— 変な二択になりやしてからに……

ちよつと、ある意味で心配になりかける一夏であつたが

「へえへえ……でしたら、鈴音リンネと。呼ばせていただきやすかね」

一夏の嘆息交じりの返事に鈴は首を大いに頷かせて

—— …… 意味……、あるんですかね？この選択は……

満足そうにしている中、一夏はそんなことを思つても

「まあ、いいわ。ほら、その……よ、呼んでみなさいよ！」

目前で真つ赤になりながらに名を呼ぶことを催促する鈴に対して

「……鈴音リンネ」

後頭部を掻きながらに

「…もっかい」

「リンネ
鈴音」

「……もう一回」

「リンネ
鈴音……」

「……最後」

瞳が潤みだしてきた鈴へと凸ピンをプレゼントしながらに

「カカカ、しつこいんですね？」

「いったあああ……あにすんのよ!!」

席を立ち、鈴へと踵を返して食器を返却カウンターへ

「存外、気に入ってるじゃありませんか？」

「?!?!し、仕方ないじゃない!あ、アンタが呼びたい方に合わせてあげてるんだから!」

「合わせて……ねえ」

「何よ?!その胡散臭そうな目線は?!なに?文句あんの?!」

「そんな、必死に言わんでもいいでしょうに……」

最後はもう腹がイタイと言わんばかりに

鈴の必死な姿に腹を抱えて笑いを我慢する一夏

「うつ…うつさい！うつさい！ええ、そうよ！悪い？！アンタが付けてくれた——」

「私の特別な名前だもの！！」
あたし

ツインテールを振りまいて、逆切れ気味に盛大に言い返す

「ぷっ……クク。カアツカ力力！！」

「わ、笑うなー？！」

「ひ、ひひ…こ、コイツは済みませんで…。しかし、まあ…余程、気に入っていただけたようで」

「絶対……アンタ、誤解してるわね…」

一夏の物言いからして、ジト目で見上げる形の鈴は嘆息交じりにそう呟くも

その言葉が一夏の耳へと届くことは無く

「しかし…アンタのその笑い方、直らないわね…」

嘆息しつつに一夏の笑い方に苦言を申す

「これも、性分ですな」

「性分ね……」

——まあ……このままの方がいいかな？

鈴もまた返却カウンターへと自身の井を返し、手を後ろ腰で組みながらに

隣を歩く一夏を盗み見る

——これ以上……変な虫に集られるのも

「？私の顔に何か付いてますかね？」
あたし

「別にー、何にも無いわよ」

一夏の問いかけをおざなりに返しながらも

同僚達の視線を牽制せんと、睨みを利かせるようにくっつく鈴

「ですかい？」

「ですよ？」

そんな鈴を好きなようにさせる一夏

一々、突っ込んでも——大概の場合、出会ってきた女性達の殆どが

一夏の意見など…話半分程度にしか聞き入れてくれない故に

最早、口出しするのも億劫となつてきている始末

「そう言えばさ、一夏」

「なんですかい？」

「いい加減、専用機は受領したの？」

「……ホンとに間が悪いですぜ…リンネ鈴音」

額に手をやって仰ぎ見る一夏に対して

「はっ？どうゆうことよ？」

唇半開きにして間の抜けた表情で問い返す

よりも、先に答えがやってきた…

「いーちゃん…！篠ノ之博士から届きましたよ…」

通路の先から、真耶が一夏へと手を振りながらにかけて来る

今にも――

「へぷっ?!」

訂正。今し方…何も蹟く物がない場所でコケながらに

「あーあー、マ―ヤ嬢ちゃん…」

—— やっ、やるわね……！

コケて涙目になりながらも顔を上げる真耶へと

一夏は手を差し伸べて起き上がらせ

鈴はそんな天然な真耶へと驚愕。何せ、起き上がらせようとする一夏の手を

その、鈴からしてみれば…親の敵とでも形容できそうなほどの胸を

鈴の視点——悪意120%満ちた視線の中では強調しながらに助け起される真耶

「あ、ありがとう。いー……ひう?!」

「?…って、何睨んでるんですかい?」

「?!き、気のせいよ!」

「へえ…。で、マ―ヤ嬢ちゃん…アレが届いたと?」

「うん。もう、輸送機内ハンガーには掛けてるけど…」

「ですか。ありゃ…腐っても——アレですしね…」

「あはは…」

一夏がウンザリ気に洩らした言葉に苦笑しながらに頷く真耶

何せ……耳にタコが出来るぐらいに言い聞かされたのだから

輸送されて来た機体が——白騎士のコアを積んだ3・5世代機

日本が開発していた第三世代の欠陥機を束が貰い受けて、強化改造を施したIS

基本構造は現行最新鋭機である第三世代と同じ技術を使われているが

搭載武装は——

「武装も……一緒にですかね？」

「うん……」

真耶の頷きに深い深い溜息を吐く

「……メッセージは一緒で？」

「何にも付いて無かったよ？」

「なら、放置で」

面倒事は厄介払いに限るという態度

手で何かを払う仕草で一夏は反射的に言い切る

「えっ…と…？いいの？いーちゃん？」

「いいも、何も…あたし私や貸し一つと言っただけであって…」

指を一つ立て

「受領しますとだけ言っただけでして…」

「それ、屁理屈だよ…いーちゃん」

「っていつか。あたし私を蚊帳の外にしないでよ」

ジト目が二つ。一夏へと刺さる

「なによ？一夏。アンタが受領した機体って、そんなに問題児なわけ？」

「…機体そのものに難があるわけではな——くはないですな…」

ツインテールに手を差し入れながらに聞く鈴

それに答えようとするも……途中で言葉を変更することになり

「そんなにヤバいわけ？」

「ヤバイも何も——つと、いいですかい？」

「…いーちゃんの立場が作用して、特に守秘義務とかはないですね。逆に、装備の稼動データを提出する側ですし」

「男冥利に尽きるという事で」

世界唯一の男性IS操者という事は、つまりは一夏でしか取れないという事だ

男性の機動データ、兵装稼動データ、その他諸々は

IS業界では唯一のXY染色体という生物にカテゴリーされる一夏に必ず付き纏う事項であり

逃れられない定めでもある。ある意味で

「いいじゃない？お陰でアンタは各国の最新鋭装備をタダで貰えるんだから」

「……世の中、タダほど恐いものはありやせんぜ？」

タダとは、つまり…恩を売ったという事

何時、何処で、回収されるか分からない代金を払えるほど

大きくはない一夏は

「何よー！中国の殲撃（せんげき）を使わないっての？！」

「……鈴音（リンネ）の所の機体は大陸刀か偃月刀の運用ベースというのもありますからね……」

「打鉄の刀型ブレードと大して変わらないじゃない！ーうちのブレード……」

「…完全、トップヘビー型でしょうが。ソレに……太刀を振るう設計思想ではないと」

肩を竦めて、嘆息を吐き出して一息入れ

「まあ…打鉄の兵装にしても、無いから使ってるっただけですけどね……設計思想は日本刀を一応前提に考えてますから」

刀型ブレードなど、所詮は日本刀を真似た刃物でしかない

いいとこ太刀と形容できるが…反りも浅く、造りも弱く、情弱そのもの

刀鍛冶はしかり、研師^{とぎし}、鞘師、白銀師、柄巻師、塗師、蒔絵師^{まきえし}、金工師^{きんこうし}

誰が見ても……刀と呼びたくないと言うほどのモノ

「太刀サイズも気に食わないですしね……私^{あたし}や打刀が一番、性に合ってます」

「じゃあ、別にいいじゃない。設計思想が気に食わないなら、手を入れればいいし……」

なおも食い下がる鈴へと再度、肩を竦めて

「それでも私^{あたし}的にはいいんですがね。お生憎様というやつで、篠ノ之博士直々の」

「御用達でもあるんですよね」

一夏の言葉を引き継いで真耶が告げる

ソレを気に食わなさそうに唇を尖らせ

「…そう言えば、アンタ知り合いつて言つてたわね？たしか…あたし私が引越してくる前に居た幼馴染の」

「そう。あね天災の姉さんつて訳でして…お陰で今でも勘繰つてしま
いますわ。あたし私の今の立場に」

「…まっ、そう思うわよね。で、結局今回送られてきた奴も気に食わないつて？」

「はあ、まあ…。ええ、そうですわ——誰が好き好んで」

け、けっへえ…という笑い声と共に

「相手を斬りながら、自分も斬るかってんですかい。あたし私やマゾじゃ、ありやせん」

「…どゆことよ？」

「ええつと…シールドピアース盾殺しなんですがね。ワンオフアビリティ単一能力で——」

「はあ？！…最初から単一能力持ちですつて?!?!」

ありえないという表情のままに真耶の言葉を遮つて叫ぶ

「せ、先生に言われても……」

鈴の血相を変えた表情に怯える真耶。荷が重いと判断したのか

「ソレは横に置いといてですな」

「置いとけるか!!! バカ!」

「横に置いて——」

鈴のツインテール両方へと手を差し入れ、其処から頭をホールドする

「ちよっ?! 近っ?!」

至近距離から瞳を覗かれる形となった鈴は

耳まで真っ赤にしながらも、一夏の瞳から逸らすことができなくなり

「鈴音^{リンネ}。使いたと思いやすか?……命削りの武器なんぞ」

「……無いわね。ってことは……シールド削りながらシールド削ると?」

その死んだような瞳に冷や汗垂らして、呆れたような口調で鈴が返すと大いに頷く一夏

「……アンタもつくづ——」

鈴が言葉を紡ごうとした時、一夏、鈴、真耶の三人が持つISに通信文が同時に届く

「っと、時間ね」

「では、後ほど…」

「ええ！見てなさいよ！！」

二人はお互いのISハンガーへと踵を帰して

「今日こそ……アンタに勝ってやるんだから！！」

腕を組んで踏ん返り返りながらに鈴は鼻息荒く、宣言したのであった

鳳鈴音 下

「敵機。二百度よりやや後方下より接近。方向反転の意図を求む」

メタルエコー
金打声

やや甲高い女のもの

「不要で。私あたしや…逃げの一点に賭けてるだけですし…ね」

ゴボリと音が鳴る。紅い命を零す音が

翼ホロ甲が切り裂き、甲高く啼く。風

その鼓膜を撃ち震わさせる音がヤケに小さく感じるくらいに、紅い命の液体が吹き零れる音が鼓膜を打つ

「仕手並びに自機状況。仕手の熱量カロリーの減退こが著しく、時の逸脱は此こ方の性能が発揮できぬ様を伸ばすのみ」

淡々とした金切り音メタルエコーはどんな感情も発さない

ただ、現状と推移される事態だけを

「仕手の滅は逃げ手を打つ限り、覆らず」

伝えるのみ

「ひつ、へ。攻めて、どうしろと?」

「華を散らせる」

「カカ。変わらないですぜ?それに、私はそんな役柄ではないので、あたしごめんで」

言葉を紡ぐ間も、背筋に悪寒が走り続ける

二つの意味合いで

「つまらぬ。百四十度やはぎのかみからしむほぼ直下より。来る」

刻一刻と迫る。自滅のカウントダウン

——血潮が枯渇して、錐揉み上げて墜落

刻一刻と迫る。白刃

——一刀の元に切り伏せられ撃墜

「袈裟上げ、切り伏せ、躍り」

メタルエコー
金打声は続ける

死を具現化した刃が自機へと降り注ぐ軌跡を

振る……われる以前から断言する

剣戟が二つ重なり、一つ鳴る

袈裟上げを迎撃する九十式打刀が火花を飛ばし、罅が入りながらも受け止める

仕手が有する神懸りのな技能によって

振り上げられた刃を巻くように払い上げる

重なり、一つ

続けて振られる切り伏せを巻いた刃で払いのける

重なり、二つ

も——其処までしか…打刀は持たず

元々、九十式竜騎兵の基本装備品。大量生産の刀

肩に抱く。長刀、太刀……“天下一名物”に引けを取らぬこの劔胄ツルギの主兵装と比べれば

いや、“天下一名物”より先に見つかっていれば…コレこそがそう呼ばれていたに違いない

何せ……この劔胄ツルギの待機形態は——蜻蛉セキレイなのだから

そんな劔胄ツルギの主兵装と比べれば

ナマクラと言うのもおこがましい粗悪品

その長大な、同じように肩に抱く鞘の前面が開く機構を用いて帯刀する野太刀を

二度も塞き止められたのは——正しく、仕手の剣爛舞踏ブレイドアーツの賜物

しかし……剣爛舞踏ブレイドアーツは刀を用いて、初めて——

「けぺえ」

成しえる

剣戟が鳴る。逃げの一手を打つ劔胄ツルギ

その紫紺の装甲を抉るように野太刀を躍らせて

けんげきがつなる
BLADE ARTS?

最後の音は装甲を削る音と共に

「……?!」

微かに野太刀を構えた敵機が揺らぐのが気配で分かる

只の一撃が、最早どんな一撃であろうと一撃必殺へと成り果てた刃を持ってしても

逃げる劔胄ツルギのバランスが崩れている

その劔胄^{ツルギ}を纏う仕手の小さな呻き声も聞こえた

なれど――紅^{スカレット}の蜘蛛にして“災厄の英雄”の手に返った手応えは軽い

「躍り命中。敵機の一撃により、此方^{こなた}の横腹^{はだ}鋼鉄に傷。損傷による性能低下なし」

「けひ…流石は失われた劔胄^{ツルギ}ですかい」

一撃が装甲を抉ることなくも…仕手の命は決っていく

野太刀が叩き入れた一撃の衝撃は容易に

「仕手。更なる熱量^{カロリー}喪失を確認。現状までに落ち込んだ熱量^{カロリー}と身体状況から覆すは不可と断定」

溜息のような声音で金打声^{メタルエコー}が響く

「此方は仕手とは巡り会えど、御堂^{ミタカ}とは巡り会えず」

悲しむことも、嘆くこともない平坦な感情のままに響く

「ま、流石に…私も^{あたし}終わりですな。けえへっつへへ」

劔^{ツルギ}胃が洩らした言葉に頷きながらに、可笑しげに笑う

否、嗤う。視線を後方から追い縊る敵機へと向ける

^{リニアアクセル}電磁加速、^{グラビティアクセル}重力加速を用いて追い縊る敵機へと

「けへ。いいですね……迷う事は最早、ありえないということですか
い？」

問いかける。楽しそうに、愉しそうに、可笑しな嗤いを上げて問いかける

なれど、答えが返ってくることはない

最早、湊影明が迷う事はないと。示されたは筈

「仕手。何が面白いと申す？仕手の心拍数は異常だ。死に瀕しても
微動だにせんかったものを」

嗤い続ける仕手へと、問う。興味があるという感じに

「カアツカカ。いや、なに、ね……」

ホツとした顔で

「半端者に送られるのだけは勘弁でしてね」

瞳を閉じて告げる

「私あたしや、確かに…あの時。背を向けやしたがね」

告げる言葉は劔ツルギ冑の疑問に対してついでに答えるようなもの

「どうにも、警察の旦那が、ね？ずっと、腹決める様なんぞ」

「私あたしにやあ……信じられないことだね？」

本能が感知したのかもしれない

何かが仕手を引つかからせたのかもしれない

“災厄の英雄”が返歌の先へと辿り着かない限り——湊影明が迷
う事はないと

「仕手。名は？」

「名？蜻蛉さんに答えられるような名は持ってやしませんよ…私あたしの
ことはチンピラで」

「……此方の感性は鈍ったのやもしれんな」

初めて、生の感情が乗せられた金打声メタルエコー

「じゃないですかい？だって、ね？」

「最低と最高がソリが合うなんて……ありやしない」

呆れたような言葉は首と共に舞った

——大蓮 アリーナ

今度は剣戟が四つ鳴った

BLADE ARTS?
よっつなつたのだ

「腕を……上げやしたね。鈴音」
リンネ

「当たり前!! 何時か、アンタと一緒に飛び回るのが私の目標だもの!!」
あたし

織斑一夏が相対するは——
ジャンジ 殲撃

中華人民共和国の第二世代量産IS

世界人口第一位を誇る国であり、必然的に

「専用機の受領はしているはずで？」

IS操縦者の適正資格を持つ者が多く、量産機の数も多い

その中の一機を鈴は

「殲撃も私こっちの専用機だつての！」

第三世代専用機の受領以前は殲撃ジャンジの専用機を与えられており

現状――

「それに……！甲龍シエンロンはまだ、調整中よ……！」

滑らせてきた一夏の太刀を鈴の偃月刀が流す

先端の刃が一夏の太刀の刃行く先を補正するレールのように

「浮遊砲台に難航していると……」

「つく……！！どう、して！アンタは、そう……！そういうのは鋭いく
せに……！！」

偃月刀を振り回す。近接する一夏が間合いを見図り

鈴の獲物の間合い微か前方へと打鉄を動かし揺らめく

「私あたしの気持ちは鈍いのよ……！！」

遠心力を込めた一撃を一夏へと叩きつける

対する一夏は無難とはいいがたいまでも

持ちえる太刀で持つて危なげなく逸らす事には成功したのだが――

甲高い音がアリーナ内に響く

「……あたし私の感も鈍りましたかね？」

現状を素早く認識し、ハイパセンサーから得られるデータ全てに視線を走らせるも

「オールグリーン問題なし…ですかい」

「やった?! 折ってやったわよ!! 一夏あー!!」

言葉と共に鈴が加速して突っ込んでくる様を上体を反らして紙一重に回避する一夏は

めんどくさそうに言葉を吐く。視界の隅、オールグリーンの横に灯る小さなウサギのデフォルメを目にしながらに

――機体の感覚を……数ミリずつ狂わせてやがりましたか

そりまちいちぞつ織斑一夏ですら化かす天災の所業に溜息を吐くしかないという面持ち

訓練であれ、戦闘機動を取っている一夏すら騙し通せる天災に

——もつと……違うことにその労力を割けばいいものを

一夏の実姉がこの言葉を聞けば、大いに賛同してくれること間違いないなことを思いつつ

「そらそらそら——！！余所見してんじゃないわよ——！」

「こら、勘弁で」

チャンスを最大限活用するという意気込みのままに偃月刀を縦横無尽に振り回す鈴

対して、一夏はおっかなびっくりと擬態しながらに逃げの一手を打つ

「こら——！待ちなさいよ——！」

「古今東西、待てと言って待つ奴はおりませんよ……と」

刃の半ばから折れた太刀を量子変換して収納しつつ

——マ—ヤ嬢ちゃん。聞こえてますかい？

ISのコア・ネットワークのプライベートチャンネル越しに真耶を呼び出す

——はははい！——ちゃん！だ、大丈夫ですか？！

——要らん心配ですわ。それよりも…打鉄の太刀生成レシピ見たいなもんはありませんかね？

——… IS 委員会が保有する機体と武装の基本概念設計式はありますが……そんな物をどうするつもりですか？

——見てのお楽しみということ……

けひつと笑みを浮かべ、真耶が送り出したデータを片目に閲覧しながら

「さつきから……！無視して……！」

眼前で偃月刀を躍らせながらに肉薄している鈴の瞳が据わりながらに

「そんなにいいか？！？！お化け胸が……！」

色々と言葉を浴びせているにも関わらず、先ほどよりも応答する数が減っているのが

敏感に感じ取れる鈴は——コア・ネットワークで内緒話している
と見切りをつける

完全に合っているのが

「なによ！なによ！そんなに乳がいいか？！おっきいオッパイが好きかあああああ……！」

乙女の勘というモノらしい……

「こっんのおお……！オッパイ星人がああ……！」

「いや、別に私^{あたし}やそんな拘りないんですが……？」

鬼気迫る表情で押してくる鈴の勢い任せの攻撃の波に

ヒラヒラと波間を漂う羽毛の如くに避けていく一夏は呆れた声音で
抗弁するも

「問、答、無用—————!!」

「ひどくないですかい?ソレ…」

激化した鈴には馬の耳に念仏並み

呆れたままに一夏は手にした太刀の生成データを頭に叩き込んで

「やってみますかね…!」

視界の端に映るウサギのデフォルメ絵を一睨みして

中途半端に使える打鉄の演算フリースペースを駆使して一夏は成し
始める

フォールディングナイフを召喚

折れた太刀を召喚

折れた太刀を量子へと変更。舞う淡い光の群れを

慎重に演算しながらにナイフへと纏わせていく

「アンタ?!なにやって……………やらせるかあ!!」

言葉から分かる通りに勘が囁く警戒に従い、圧倒しようとする鈴を
交わしながらに

生成していく

「たたら吹きから鍛錬、省き。積沸かしから生砥ぎをそこそこに。
土置き、焼入れはおざなりに。仕上げは捨て」

折れた太刀の破片がナイフを覆っていく

刃先が伸びる。少しずつ、少しずつ

まるで――

「持って……一合、二合ってところで」

脇差のような形へと、否…鞘さえあればソレは脇差の模造品へと

「……せ、戦闘機動中に…武器を作っちゃったっての…?!」

戦慄するは管制塔で一夏と鈴の戦いを見守る技術者達と相對する鈴

真耶も驚きの表情を浮かべるも…普段から驚きなれている故に、鈴
達ほどではなく

「さて、時間も迫っておりますしね…終わらせますかい？」

肉薄する鈴の横腹を両の肩に吊るされた形で乗る装甲を押し当てて、
一気に押し出して間合いを退ける

「上等……！」

その一手に綺麗に乗って、自身で間合いを離れた鈴は偃月刀を真つ直ぐ前へと構えて止まり

一夏の構えは右手を押し出すように前へと掲げ、左手に持つ脇差モドキを刺突の構えに

右手を捨て、左の一刀で刺し倒す一撃でケリをつける体勢

「偃月刀の間合いを忘れてんじゃないわよね……！」

先ほどまでの喚きとは正反対な真剣な面持ちで言葉を紡ぐ鈴の言葉に

「ひへっ、へへへ……」

耳に障る笑い声を微かに上げて一夏は応える

両者、互いに位置あわせ。PICが齎す不安定な浮遊感を制御しつつ静かに滞空し続ける

10秒

20秒

時が刻一刻と流れ行く

3——鳥の鳴き声が響いた

「はっ!!」

一閃を先じたのは鈴

脇差と偃月刀のリーチ差を最大限に利用した刺突

物理的な差は――

「きへ……」

魔術か奇術か……そんな領域に達した剣腕によって

「へえっ…へへへ」

覆された。ブレイドアーツ剣爛舞踏によって

「カアツツツアツカカカカ!!」

オーバー・ザ・エッジ
真剣

不条理な程に……不利がつけば不利な程に、発した武者の理を上げていく

一刀流最奥の技の一つ。真剣

限定条件可のみにて発せられるこの技

今回の場合は――鈴が刺して来た偃月刀を前へと伸ばした右腕によって

その刃を上を滑っていくように押し出しつつ直下へと体重を掛ける
一つ間違えれば

上手く乗れずに手が先端から両端に捌かれるか

自重を乗せる段階において刃先が足を捌くか

はたまた、勢いがついて肩を抉っていくか

どのような場合にしろ…失敗すれば命をも奪われる諸刃の剣

だが、しかし……最奥を蘇らせた

魔剣、神剣、等と呼ばれた奥義。インメル・マントーン金翅鳥王剣を成しえる一夏にとつては――

偃月刀を地に見立て、腕の力だけで自身を舞い上がらせる

鈴の放った一撃を無力化しつつ、自身の一刀は一撃必殺の構えへと昇華する

刹那の時間の間に

——あ…

鈴の視界の先、上方に飛ぶ一夏の姿

真っ直ぐに自身へと舞い降りてくる姿

その背から舞い降りる

——うぁ…

真っ直ぐに掌を伸ばす

捕まえたいと、その舞い落ちてくる

黄金の羽

鳥の翼ようできて

——い、ち…か…

蜻蛉の羽ようにも見える

幻想的な羽を掴む為に

鳳鈴音は精一杯、手を伸ばす

織斑千冬

——この想いは捨てなければいけない。断じて、私が抱いてよい
想いではないのだから

運命に逆らいし戦乙女は吐き捨てた

——IS学園 海上

瀑布が滴らせる飛沫と同じように

「クツ…カカカ……」

海面を疾走する

灰色のIS。世界唯一の仕手の意思のままに

「けひ…」

歪む。歪み続ける。

相対する者から得られる——

「腕が衰えちまったら……お飯の食い上げなんでね」

威圧感。背筋を震えさせる唯一の存在を感じ取りながらに

今だ、ファースト・シフト一次以降も移行していない機体

「いーちゃん!!」

「今さら、グダグダ言っても意味が無いですぜ？」

コア・ネットワークから伝わる真耶の切迫した声音に涼しげに返して

“雪片弑型”を召喚し、海面を斬る様に切っ先を地へと向けながら

「不利なら不利なりに、ね。やりようがありません……」

歪み続ける。□元がどうしようもないほどに緩んでいく

「さあ……やりましょうか？姉さん^{あね}」

海面を走る灰色

第3・5世代にして、天災が作り上げた欠陥機

“白式”を駆る一夏を追うは――

第四世代。篠ノ之東が愛する妹の為に作り上げた“暮桜”

そのプロトタイプ型。“桜花”

第3・5世代IS、“白式”と同じ世代襲名を背負った

ブリュンヒルデの新たな劔^{ツルギ}

その手に構える“雪片”を八相に構えて

「一夏……！」

ブリュンヒルデ^{チンピラ}
織斑千冬は織斑一夏と舞い踊る

— IS学園 アリーナ

「いーちゃん!!」

真耶の切迫した声音は終いにも届かず

「山田教諭。嫁の邪魔をしないで貰おうか」

アリーナ席にて自身のISから通信を送る真耶の隣に立つ

ラウラ・ボーデウィツヒが腕を組み、すました表情で淡々と告げる

現状、このIS学園

今年度の新入生の入学式を行っている状況なのだが——

「しっかし…まあ、一夏の奴はいつも、いつも、損な役回りよねー」

瞼の上でひさしを手で作りながらに周りの喧騒に負けない声音で鳳鈴音は告げる

会場のスクリーン一杯に映る千冬と一夏の模擬戦闘を見やりながらに

彼女と彼の一喜一憂に喧騒を上げ続ける。女子学生達の歓声を背に

「仕方ないんじゃないかな？一夏って世界唯一の男性IS操者だし…」

シャルロット・デュノアは男性用のIS学園の制服を纏った姿で言葉を洩らす

コア・ネットワーク内に

「と言いますか。最初からコレでお話していた方が良かったので――」

小首を傾げながらに言葉を紡ぎだすも

「流石ですわ！！一夏様ああーーーー！！」

スクリーン内に映る千冬の“桜花”が手に持つライフルを

追走される形でありながら、まるで瞳で確認しているかのように回避していく一夏の姿を認めた瞬間には

肉声を盛大に上げており

「うっさいわよ！！英国淑女^{ロートル おんな}！」

「言いましたわね？！中華^{バクリ むすめ}娘々！」

ギヤアギヤアと喚きだした二人の少女を無視して

「貴様。何故に嫁と同じ制服を着ている？」

冷えた声音でラウラがシャルへと問うと

「うん？えつとね……まあ、色々と事情が重なったからなんだけど」

笑窪に人差し指を置きながら

「でも、怪我の功名って奴だっけ？日本の諺の。ソレだね」

満面の笑みでありながら……どこか優越感に浸った笑みに

「ほー……詳しく内容を聞きたいものだな？」

冷徹なる軍人そのものの表情でラウラが再度問うも

スクリーンの中が激しく明滅すると一同の意識はソッチに持ってい
かれる

火花が散っている。鏑迫り合いに互いの太刀を合わせる千冬と一夏の
姿

「…ぬ？アレは——」

「ああ？！アイツまた、武器を変形させて！」

「あ、あら？！」

「……理不尽だね。一夏……」

彼女達の眼前のスクリーン内にて映る両者の太刀

その一本。“雪片式型”と名づけられた量子変換域バックージを全て使い切る
駄剣

その一部を先日ソード・プレイヤーの鈴と立会いにて見せた量子変換を一部分だけ行い

「武器破壊狙いか、嫁よ」

ラウラがその形状を瞬時に見渡して出した結論を口にする

言葉の通りに武器破壊。日本の古くに培われた警棒術の一つにして
“十手術”

二又。十手特有の部位へと変え始めた“雪片式型”

「っていうか。アンタそれだけ？！あんなの不公平よ！！」

「き、器用ですわね。一夏様……」

「器用で済ましちゃうんだ…オルコットさん」

ソレを嫌った千冬が合わせた太刀の柄。元々がISでの運用を設定されている為に

柄の部分が大いに余っており自身の“雪片”へと片足を見舞って強引に斬り離れる

「うわぁ……千冬さん。強引ってか、アレで一夏に手を出させる隙間を出さないのが……」

「流石は教官だな。嫁の姉であり、我が義姉上おねえさまに成られるお方である」

頬を引きつらせながらにスクリーンに映る映像に乾いた声音で呆然と洩らす鈴の横で

ラウラが満足そうに首を縦に振る

「って！！誰が誰の義姉上おねえさまになるって？！？！」

「耳が遠いか？それは残念だな、小娘」

「アンタに言われたくないわーーーー！！！」

ラウラと鈴の言い合いを尻目に

「しかし……一夏様も強引な事を。アレではエネルギーを余分に消費されますように……」

頬へと手を当てて、心中穏やかではないセシリアは溜息のような言葉紡ぐ

「でも、一夏のことだから何か勝算があつ——」

セシリアの言葉に答えるようにシャルが言葉を紡ぎだした時、ソレ
は放たれた

押し飛ばして、眼下へと高度を落とした一夏が

——剣で風を受け始めたのを

更なる歓声がアリーナ内を覆う

一夏が繰り出した神技に等しい一刀

同じように入ってきた新入生達は一夏のISが描く螺旋の軌跡にて
駆け上がる姿の勇ましさに歓喜の表情で

二年生。一年が経ち経験を積んだ者達が高みに度肝を抜かれる
という表情で

三年生。豊富な経験と詰め込んできた知識を総動員するも信じられ
ないと言う表情で

女性達の悲鳴のような歓声がアリーナを包む中

バレル・ロール・エッジ
「独妙剣」

シャルが洩らした呟きは…同じ年代の恋敵達ライバルに確りと届いており

「……デユノアも見たんだ？一夏の最奥おほしの一つ」

ジト目かつ白けた瞳で見やる鈴に対して

「僕のことはシャルでいいよ。その代わりに僕は鈴さんって呼ばせてもらうから」

「鈴よ。でシャル……アンタも受けたんだ？」

「そう言う鈴さんも、知ってるんだ？」

「ふっふーん！！私あたしは一夏と幼馴染だからね。ま、全部知ってるわよ〜」

シャルの言葉に無い胸を反らして見下すように全員を見回す

幼馴染。その一言だけで…幽鬼のようにして能面の表情で鈴へと視線を返す一同

「な、なによ…アンタ達…」

その勢いに飲まれ、タジタジとなった鈴ではあるが虚勢を張って返す

言葉は震えているが……

「へえ……僕、興味あるなー」

棒読みのままに言葉を紡ぎつつも、瞳は爛々と輝くシャル

ラウラもセシリアも似たようなものであり

「し、仕方ないわね！いいわ。あたし私が特別に教えてあげるわよ」

意地を張りつつも、形勢不利と悟った鈴が素直に言葉を発していく

「シャルが見たのが、言ったように独バレル・ロール・エッジ妙剣。後は、真オーバー・ザ・エッジ剣と妙剣と絶妙剣と」

そうして、一度言葉を切って

「インメルマン・ターン金翅鳥王剣」

言い切る

「インメルマン・ターン金翅鳥王剣……？！」

鈴の言葉を聞き入れていたラウラの細めの瞳が

大きく見開かれる。思わず、取っていた腕組みの体勢をやめて

「ふ……ははは。なんだ、そうか…嫁はちゃんと私にも残していつてくれたのだな」

一人、納得したと言う面持ちで頷くラウラに

「アンタ？！もしかして、一夏にインメル・マントーン金翅鳥王剣を使わせたの？！」

それに驚いた鈴が問い詰めるように、ラウラへと詰め寄りながらに

唾を飛ばさん勢いで詰問する

「そつだが？何か、問題でもあるか？」

鈴のその態度に……ラウラは己が受けた一撃が今しがた鈴が語った五つの剣技の中でも重要な部分を担っているのを推測して

勝ち誇った笑みを浮かべて、鼻で笑うように鼻息を洩らして答え

「えっ？えっ？わ、私……私^{わたくし}だけ、そのようなことが……」

鈴が告げた言葉はどれもセシリアは耳にした言葉は無く

そもそも、そんな大それたモノを放つような一戦などでは無かった為に……膝を笑わせながらに愕然とし

「鈴……そんなに凄いの？その……金翅鳥王剣^{インメルマン・ターン}つてのは……？」

訝しげに、少し不機嫌気味に鈴へと問うと

「凄いも何も……！一夏の一番の奥の手よ……私^{あたし}だって、まだ使われたことないわよ……！」

シャルの問いかけに怒りながらに鈴は叫ぶように返す

「はっははははは……！……！……！……！嫁は私を選んだという事だな！コレは早速、副長に連絡して事後の作戦立案を……！」

有頂天になるラウラであるが……真相は最初から最後まで激化したままであったラウラと最新の第三世代型の強硬なシールド

引っ掛けやすかったのが噛み合っただけで……一夏自身は其処までラウラの実力を買ってるわけではなく

「くっしょー……！！！！一夏のやつうう！！」

今、此処で地団駄を踏んでいる鈴の方が一夏の内部評価が高い事を追記しておこう…

まあ、だからと言って

「「……………」」

怒髪天状態の鈴と肩を盛大に落としているシャルとセシリアには…そんなことは分かるはずも無く

分かったところで、有頂天になる者が鈴に変わるだけであるが

そんなやり取りを行っている専用機持ちの少女とは無関係に

一夏と千冬の激闘は駆け上がっており

更なる盛大な歓声とスクリーンから齎される剣戟の音が響く

「……………いーちゃん」

今まで、会話に参加していなかった真耶が心配そうに一夏の名を紡ぐ
場面は終章へと足を掛け始めており――

画面の中の一夏と千冬の位置は最早

―成層圏

差し掛かる一步手前までに互いは互いを入れ替えながらに

「カカカッカ！！！」

「五月蠅いぞ！！愚弟！！」

駆け上がる

一夏の下卑た笑い声に対して

一喝するも……顔も全身も何もかもが、嬉しいと言つ態度を表し続ける千冬の一喝の言葉など

返事にしかなくておらず

「剣腕を上げなさつて！！」

「何時までも、お前に師事しているつもりは無い！！」

嘘である。織斑千冬の宣言は

心の片隅では――

「き、へっへっ……流石は戦乙女ブリュンヒルデの名を持つ方で！」

「白々しい！！そんな名で呼ぶな、馬鹿者！！」

“雪片”と“雪片”がぶつかり合う

互いが互いを求め合うように――

なおも、その胸中に秘めたる想いは互いに違う物であるが…

懐へと潜り込むように一夏が高度を更に上げようとするも

ソレを阻止せんと同じように高度を上げる千冬

互いに千日手のように続く螺旋の階段を上り詰めるは――

「貰ったぞ！！一夏！！」

機体性能差によって微かに上回る千冬が

とうとう…機先を制して仕掛ける

「き、ひ…」

「大人しくしてろ！！」

潜り込もうとする刹那をカウンター気味に引き寄せて

そのまま、羽交い絞めにする。左肩をロックして抱き寄せる

——あ……ヤバイ

濡れてきた

愚弟と呼ぶ男の首元に顔を埋める形となり

湯気立つ男の汗の匂いと男本来の匂いにが混ざり…フレグランスの
ように匂いたつ

一夏も思春期を迎えた男ゆえに…エチケツトに市販のフレグランス
等を少量吹きかけているというに

——くるな……コレは

絶賛激闘中だと言うのに…思考の一部がおかしくなって来ているが
自覚できるも

戦闘者としての本能と千冬としての本能が合わさってより強行に

——だが、離さん。断固としてな

瞳の色合いが剣呑としてくる

更に、強力な羽交い絞めを行う自身の体に満足して

「さあ…！一夏！終わりだ、諦めて降参しろ。あの天災^{バカ}が欲してい
るデータは取り終わっただろう」

耳元で囁くように、唇が無意識に一夏の耳を食むのを自覚しないままに紡ぐ

「き……へ…へ」

気管が少し圧迫されており、肉声が擦れるも意思を示す方法は幾らでもある中

一夏は自身の実姉が耳を食む事実も忘却に追いやって――

襲い来る。激痛に備える

意識を明確にして

気管を押さえられていながらも奥歯を食い縛り

自身のISの掌の装甲を部分排除し、鉤爪のような切っ先で肉を突き刺し

意識を手放さないように自身に痛みを与え続けながらに

盛大な音が響く

一夏と千冬の間だけで

歪な感触を――

「な……ん……だ……と?!」

呆然と言葉を紡ぐしかなかった

全身の血の気が引いていくしかなかった

懇親の力が抜けていくしかなかった

その音を聞けば――盛大に押さえ込んだ左の骨が破碎する音を聞けば

アリーナ全てに悲鳴が木霊する

ISとISの力が拮抗しているからこそ硬直していた状態

世界最強の軍事力に匹敵するポテンシャルを持つISがフルパワーで押さえ込んでいた状態で

ISの装甲を排除するということは――

「けえ……へ」

左肩が無残な姿を晒す

あらぬ方向に向く腕。露出した肩の骨

もはや、直視できないほどに凄惨極めた負傷を抱えながらも

千冬が呆然とした表情のままに見下ろす

至極、当然。先に記された通りに全身の力が抜けていけば…脱出するの容易い事

落ちていく

全身の装甲するらも脱ぎ捨てた姿

墜ちていく

ISスーツ一枚で真つ逆さまに

墜ちていく

海面に叩きつけられれば命など無い姿のままで

オチテイク

正道ぜんでもなく、邪道あくでもない

——あたし あたし私は私だ。他の誰でもない。雪車町一蔵であり

ただの外道チンピラは

「織斑一夏………なんでさあ！」

ソウゴウノカマエ装甲ノ構を携えて——

おちていく

織斑千冬（後書き）

次回、最終話

“ ようこそ、ラブコメがくえん IS学園へ ”

予告無くタイトルは変わります

ようこそ、 “IS学園（ラブコメ）” へ

「やあ、みんな～お帰り～」

陽気で無責任な声音が木霊するも

その声に返すモノはあらず。されど――

「あゝあゝ……見事なまでにボロボロだね」

声音の持ち主は作り物の兎さ耳を揺らしながらに

軽快に歩み寄る

「乙女の柔肌をこんなにしちゃって……いっくんにはお仕置きが
必要だね!!」

腕組みをして、まったく恐怖も怒りも伝わって来そうにない仕草で

篠ノ之束^{てんさい}はボヤク言葉を嬉しそうに言い切る

目前に掛けられた三機のIS。第二世代量産型IS、“打鉄”に搭
載されていた

「けど……どうだった？―雪車町一蔵^{いっくせん}にして織斑^{いっくせん}一夏は？」

ISの心臓部に当たるコアへと問いかける

作り物のウサギの耳をピコピコと動かす動作をもって

「うん。うん。そっか〜、そりゃよかった！東さんも頑張った甲斐があったよ〜」

声音は束のモノしか室内に響かなかったが……

代わりに強い光が淡く明滅する。各々が意識を持っているかのようにバラバラの光り方を放つ

「もうね。篝ちゃんとー…ちーちゃんとー…」

指折り数えに言葉を発しながらに天井を見つめる束

声音は今にも踊りそうなほど弾んだものだというのに

「いっくんだけなんだ。満たしてくれる人は〜」

その瞳は虚空を捕らえ、空虚を反映させる

異常な程に――

「特に、いっくんはねー。とっーーても！満たしてくれるんだよー？」

三つのISコアへと楽しそうに告げる

「だから、束さんは……いっくんの赤ちゃんモルモットが欲しいのです！……！」

愉快に告げる。コアはどれも答えることはせず

「いつくんのだったら、とっても楽しいと思わないかな？」

楽しくて、楽しくて、たのしくて、仕方ないという表情のままに

「精子だけ回収して、受精するのでもいいんだけど……やっぱXX染色体に生まれたからには、一度自身で実験しておきたいってのもあるんだよねー」

「束さんは基本的に種を撒くけど……刈り取ることが少ないからねー。チャンスはモノにしなきゃ！」

「でも、痛いの嫌だなー……」

マシンガンのように言葉を放ち、最後は勝手にブルーが入る……

自己完結してしまっている束の言葉に、三つともが呆れたような雰囲気醸し出し

「さ……て、そろそろ……ちーちゃんが我慢し切れなくて襲い掛かってくる時間かな？」

子供が持ちそうな腕時計へと目をやって

「あと、どのくらい時間は残ってるのかな？」

待ち遠しいと、全身で表し声音はさらに弾んで

「頑張つてね。いっくん」

「“災厄の英雄”がやって来るまでに」

「蜻蛉に辿り着いてね？」

三つのISコアが打ち震えるように強く明滅した

――成層圏

熱が無くなった

これが……ッルギ劔冑ならば

――……は、ああ

瞳の中に捕らえる一夏と同じように、錐揉み上げて墜落は免れなかったであろう

そう断言できるほどに、彼女、織斑千冬は

——ありえない

全身から血の気が無くなったと強迫観念に晒されているような感覚を

——ありえてはならない

強く、強く、感じ取る。感じ入る

呆然と空に浮かび続ける

刻一刻と墜ちて行く一夏の姿が……コンマよりも短く感じる体感時間の中でも

——あつてはならない

やけに大きく動くのを見据えながらに

盛大な破砕音。一夏の骨が目前で爆ぜる様に碎ける様が

スローモーションのように脳内を延々と巡りいく。壊れたプレイヤーのように

永遠に同じ場面だけが、再生され続けるのを脳裏で見ながら

瞳で……大海に混ざれば、混ざったという事実すら翳んでしまうような血飛沫

だが、しかし……人体内に収まっている量を鑑みれば——致命傷に成りえるほどの血液

舞い散らせながらに、墜ちて行く姿を

視界の端に捕らえる。ハイパーセンサーが齎す各所の映像

その中のひとつに——一夏の暴拳を瞳が捉えた瞬間

脳内が事を感じし、行動を起こす指令を送るよりも早く……彼女たちは動いた

魂に刻まれんほどに魅了された最愛の男を求めて

五つのISがアリーナを飛び出していく姿を

完全に再現される前に、誰もが推進装置が乗る部位を真っ先に再現し

碌な装甲を纏わない姿のままに大空へと飛び出していく姿を

誰もが涙し、叫び、装甲を纏わせながらに感情の赴くままに駆け走っていく姿を

——嫌だ

この結果は、墜ちいく一夏を生み出したのは

——断じて、くれてはやらん

己自身であることは身に染みて分かっている

—— お前だけなんだ

この感情を押さえ込むことは出来ない

何せ——

—— 私の家族で

吐き捨てるように諦めないといけないと

—— たった一人の男なのは

いじみく、子供の癪癪のように納得したつもりで

—— お前だけなんだ

まったく、納得できていない織斑千冬は

思い出す。今までの人生を

一夏が生まれ、共に育てられ、捨てられ

それから二人だけで生きてきた

未成年。それも女という身で生計を立てねばならない立場へと追いやられた

千冬を支えたのは、あの……強烈な個性

人を馬鹿にした態度を取りながらも、誰よりも

——“私”を“私”にしてくれるのは

一生懸命に生きる人が、誰よりも好きだと公言して憚らない

ふざけた男が居たからこそ

——私が此処まで来れたのは

天災に誘われ、ISを纏い

世界相手に戦えたのも

——私が生きてこられたのは

あの——チンピラと言い切る男が居たから

「いちかあああああ——————————！」

腹の底から声を出す

ありつただけの、自分自身すべてを使い切れといわんばかりに

織斑千冬は——

「けっ、ひ、……敵の名を求めちゃいけないぜ？姉さん^{アネ}」

墜ちて行く姿のままに、一夏は必死な形相で自身へと急降下する千冬と

背後。大地から駆け上がってくる五人の乙女たちをハイパーセンサーで確認しながらに

「けひ……あゝあゝ……必死こいてからに……」

嘆息を吐血交じりに吐く

「何所がいいのかねー……こんな」

激痛が走る左腕を痙攣する。痛みと込み上げる可笑しさに

右手で頭を掻いて

「チンピラの何所が、ね」

溜息を吐く。唇の先に赤い風船のようにこびり付く血を弾けさせな

がらに

「だが、まあ、」

瞳を一度閉じて

「ね。今は関係ありやしない……」

感じる想いを捨てさる

そうして、構える

「けひひ……確か、こうだったかね？」

構える。ソウコウノカマエ装甲ノ構

かつて、激怒し……最後に憎悪の殺意を抱かせんとした

「そのままは、つまらないですから……あたし私はこうさせてもらいますか」

湊影明が構えた姿

ソレと真逆の腕で、激痛に浸された左腕を無理やりに動かし

脂汗を額に乗せて……構える

量子化した“白式”が再度、現れる

「力……カ力カ」

一夏の周囲を踊る。無数の破片のように“白式”であった物が踊る
灰色の装甲が舞い踊る中を悠然と墜ちいくままに

「あたしのりと私に呪詛なんてありませんわ」

突き出す。前へと、勢いよく、痛みも最早、遠くに感じながらに

駆け上がってくる五人の乙女達が求める腕を拒絶して

彼女達が作り出した花道はなみちの中を墜ちながら

舞い踊る装甲が寄り集まる

一夏へと纏わりついていく。甲高い…鉄と鉄が重なり合う音を響かせて

現れる。無骨で丸みを帯びた…ISとは真逆の鈍重そうな姿を作り出す

大和の軍史に残る名騎――

「力カ…懐かしいもので」

九十式。六波羅陸軍正式採用主力劔冑

「この、がったり合当理の騒音は――」

頬が崩れるのが自覚できる

懐かしき得物との再会

ドラグーン
竜騎兵への

誰も彼もが、瞳を丸くする。驚きに言葉が出ない

その姿は…既存のISのどれにも当てはまらない。フルフェイス全身装甲

強固な鋼の筋肉と見たれらるほどの分厚い装甲が

全身を隙間なく覆う機体など——今までに見たことがないのだから

装甲は一瞬。千冬が最大戦速で駆け下りてくるのも一瞬

交差したのは——鈴、セシリア、シャル、ラウラ、真耶

彼女達の目の前で、千冬と一夏の会合は過ぎ去り、

過ぎ行く。直下に下りていく千冬が啞然としながらに

過ぎ行く。直上へと上り行く一夏が嗤いながらに

相対的に。駆け降りていた千冬は止まる

求める者が空へと駆け上がっていく様を見れば…急ブレーキをかけるように止まるのは必然であり

空を見上げるのも…また、必然である為に――

相対的に。駆け上がっていた一夏は停まる

上昇速度が無になる刹那の時… ゆっくりと魔術めいた剣技を穿つのは必然であり

地を見据えるのも…また、必然である為に――

両者の視線が交わる。五人の乙女達が作る輪の中で

コア・ネットワーク

一夏以外の空を舞う者たちは――

幻視する――黄金の羽を

――アリーナ

盛大な音を響かせて、二つの鉄が地面へと叩きつけられる様に着陸する

……着陸というのもおこがましいほどの、不様さであるが

「ひ、へ、へ……剣腕を上げなさって……」

「?!お前!こんな時でも……!」

一夏が千冬へと覆い被さる体制のままに

晒いながらに告げた言葉に真っ赤になりながら抗弁する千冬

しかし、なおも言葉を紡ごうとする千冬を牽制するかのよう

纏っていた九十式竜騎兵。その左肩部分以外の装甲を解除して立ち上がる

「力力力……力……力」

「い、一夏?!?!」

も……大怪我を負ったのは間違いなく

さらには、そのような状態で金翅鳥インメルマン・ターン王剣を放ったのだから

必然的に、立ちくらみでも起こした様にふらついた一夏を

慌てて、支えようと立ち上がりかけた千冬

しかし——それよりも早く

「この……！馬鹿者！お前は、いつも、いつも……無茶ばかり……！」

長いポニーテール。緑色のリボンで結わえており

切れ長の眉と鋭利な印象を与える瞳を持つ少女が

涙ながらに一夏を支える。両脇から手を差し入れて、自身へと寄りかからせるように

少女が泣きながらに一夏の背中へと顔埋めて叫ぶ

まさしく、おいしい場面を搔つ攫った少女であつたが——

「あー……どちら様ですかい？」

空気が割れる音が聞こえた

少女の額に特大の怒りマークが浮かび上がった

まあ、つまり、結局は……幾ら死闘を演じ、大怪我を負ってシリア
スちっくになったところで

雪車町一蔵は、織斑一夏でもある為に

「こんのおおおー！薄情者をー！ー！ー！」

盛大な紅葉が頬につくのは必然であり

このお話が

インフィニット・ストラトス
I・Sっぽいモノであり

装甲悪鬼村正っぽいモノである

ということは変わらないということ

つまりは……

「「「「「夏あつあつああ！……！」」「」」」」

「三十六計…逃げるにしかりつと、ね」

何処まで行っても、二つの本質は…あまり変わらないということだ

ようこそ、 “ IS学園（ラブコメ） ” へ（後書き）

最後はグダグダ。それがラブコメだと思う

正直、前話が真のラストだと言い切る！

あとがきから中書きへ

ばすてるチャイム3が待ち遠しいです。はい

どうも、こんばんわ。作者のーと申します

出だしのネタが分からん人には分からん仕様過ぎますが…w

さて、今作“元はチンピラ。今世もチンピラ？”ですが

自身のお気に入りユーザー様に登録させていただいている作者様の作品から

創作意欲を貰った次第でありまして……まあ、比べられないほどに駄作ではありますがねw

まあ、その方の作品の面白さから、ISという作品を知り

同時期にTVアニメもやっております…まあ、気分転換にちょっと手を出してみようかな？という次第で書き始めましたと

言ってみたかったです——

ぶっっちゃけた話

友人とシヨップで全四種しかないスポーツタオルを見た時に

書く決心をしたんですが。(・ω・)(・ω・)ネー

とりあえず、ヒロインの小話でも

>ラウラ・ボーデウィツヒ<

ウサギさん。とても人気があるキャラという感じに認識

如何せん、作中内で軍人つてのがネックになっている作者的には扱いづらいキャラベスト3

しかし…色々友人、知人に聞く限りでは作中でその設定はあまり生かされていないとか？

まあ、とりあえずの掴みの為に一話目から登場してもらいました的に終わっちゃた

>セシリア・オルコット<

ちよろいさん。中の人補正もありますがキャラ的にも好きな部類

正直言つとこの子と鈴ちゃん書きたいからこの作品書いたと言いつける

ただ…操るISの微妙さというか、実験機過ぎるためにただ一人剣技見れずじまい

けど、そういう役割がつばに入ると勝手に解釈してます

>シャルロット・デュノア<

男装。僕っ娘。なんか、とりあえず…原作で一番鼻屑されてたんじやないかな？アニメ見てる感じだと

「一夏のエッチ…」は本作品には出て来ず仕舞いでしたが、一番性格が穏やかそうな子なので

纏めたり、繋いだりと活躍してくれそう。けど、そんなシーンはラストにしかなかったけどな！

>鳳鈴音<

最初は、おおとりすずねってよむんだとおもったよ！！

で、まあ、冒頭の通りにあまりに不憫な扱い。原作ではヨゴレを押し付けられてそうとか、一人二組というボツチ扱いとか

グッズでハブられるとか……。でも、彼女はめげずに立ち上がるのさ！

まあ、ただ一人三話分名前が挙がってるという事実が作者のえこひいきという真実である

続き書いたとしても、変わらずえこひいきするけど)。・・ω・)
(・ω・、。)ネー

ってな感じでございまして…

回収しきつてないのとか、色々とありますが後は皆さんの脳内で補完してあげてください

……初めてこんな形であとがき書いてみたけど、肌に合わないなw

消すのも勿体無いのでこのままアゲでw

では、また何処かで会えましたら宜しく願いします

一夏の仕事（前書き）

ちよくちよくと要望が上がってきたのと書く意欲が少し出たので更新

最初の部分は――邪念編のあらすじまんまに抜粋です

一夏の仕事

抜粋。そうコレは——抜粋だ

「装甲悪鬼村正を知らない人の為に。“装甲悪鬼村正”あらずじ」

慇懃な男。自他共に認める根暗星人とまで呼ばれたほどに……陰鬱な雰囲気醸し出す男が告げ

「認知してください」

その対面に立つ薄い紺色のポニーテールに、際立つような白さを持つワンピースを着た少女は

ハニカミながらに……書類上は兄に当たる男へと凄まじい一撃を与える

「知りません」

しかしながら……少女に対する男の陰鬱で能面のような表情は変わることなく

声音すら起伏を感じられるものではない。淡々としたもので

「じゃあ、世界滅ぼします」

そんな答えが返ってきて、少女が応じた言葉は——どう捻っても
辿り着かない答えへと辿り着いて

ことさらに、近所のスーパーで買い物でもするぐらいのノリで告げ

「じゃあ、殺します」

さらに男が答える言葉もぶっ飛んでいて——

・I S 学園 保健室

「……雪車町一蔵^{あたし}の人生がA4原稿用紙の半分にも満たないぐらい
に纏められた気が……」

寝ぼけで重苦しい脳で、意味不明な言葉を垂れ流すは

雪車町一蔵であり、織斑一夏である。ORIMURA ITIKAは
清潔感というよりも薬品臭い匂いが染み付いた

ベッドから半身を起こして辺りを見回すと——

——…ああ。そういえば、追い掛け回されて血が足りなくなったような、感じてしたか

窓からは頂点に上った太陽の日差し零れ入ってきており

時間の程を正午と推定できる中。見回した視界の中で気づくことは

「……疲れが溜まってましたかね…マ―ヤ嬢ちゃん」

自身が眠っていた真っ白いベッドの横合いに顔をだらしく横たえて

半開きになった――

「あゝあゝ……いい大人の女が涎を垂らしてまあ、色気の無い……」

口元にベッドのシーツを寄せて、唾液を拭き取ってやる

どうにも、手の懸かる駄目な姉を世話するような面持ちで

「うにゅ……いーちゃん……」

夢でも見ているのだろう。一夏が口元を拭ってやれば、反応したかのように

更に口元をだらしく優越に、幸せそうに崩す

仕方がないと、肩を竦めて真耶の額に人差し指をさして

「^{あたし}私の夢を見てる暇があるなら……男でも捜しなさんな」

ゆらゆらと揺らめかせる。眠りこけて力の入らない首では一夏の為すがままに

左右へと揺らめく。ゆっくりとしたヤジロベエのように行ったり来たり

そんなことをやっている――

“一年一組副担任。山田真耶先生。一年一組副担任。山田真耶先生。至急、教室の方へと御戻りください”

館内アナウンス。少し早口の一夏が聞いた事の無い女性の声音で部屋保健室内に響く。廊下からも同じアナウンスが響いている事から校内全域に掛かっているのだろう

「っと――マ―ヤ嬢ちゃん。呼ばれてますぜ……」

傍に居てアナウンスを耳にした以上は起こしてやるのが人情

チンピラと言えども、こんな小さな事で意地悪を起こす気になることもなく

「ひにゃあ……い、いーちゃん……だめだよ……まだ、あかるいよあ……」

「………いつたい、何を見てやられますかい……」

起こしてやろうと身を揺するも、アホの子のように寝ぼけた言葉を

吐き出すのみで

思わず、顔を掌で覆いやりながらに再度肩を竦め

「仕方がありやせん。連れて行きますか…」

——あたし 私も行かないといけませんしね

ベッドから這い出る

「スースーすると思いましたが、院内服って奴ですか」

這い出て一番に思うことは自身が着せられていた服

よく病院内にて患者が纏っている薄布一枚の羽織物をシゲシゲと見
定めた後

自身が着ていたISスーツなり、私服なりを探す為に視線を彷徨わ
せるも

—— まあ、あるわけないですわな

ソレ一つで世界中を飛び回っていた大型のキャリーバッグが近くに
あることもなく

さりとて、自身の私服もスーツも何一つ無い中…

—— 何故に？男物の制服があるんですかね？

首を傾げながらに身を横たえていたベッドの脇。壁に掛けられていた

IS学園の制服。ソレも――

「サイズは……私にピッタリって事は、私のですかね？」

女の園たるIS学園。ただ一人、男――と言っても、教職員に男性が居ない訳ではないが――

一夏の為だけに用意されたであろう制服を取り

「背に腹は返られませんか」

そつ呟きながらに手にとって着る

「……ピッタシで。まあ、姉さんにマ―ヤ嬢ちゃんと私のパーソナルデータを知っている関係者が居れば、当然ですかな」

袖口も、襟足も、ピッタリと一夏に合ってしまう制服

「しっかし……。なぜ、用意したんでしょうかね……？」

自分用に用意された制服相手に首を傾げるも、着る物が無い現状

コレに甘んじるしかない一夏は疑問を切り捨てて

「ちよつくら、失礼……。って、思ったよりか――」

真耶の元へと戻り、お姫様抱っこで抱き上げるも

「重、げぺー！」

直撃した顎を擦りながらに

「裏拳ですかい……。しっかし、まあ……女性に対しての禁句は寝ていても呟けないという事で」

呻きつつも、抱く形を整えるために二、三度抱え直して歩き出す

起用に保健室の扉を足先で開けて、閉めるという動作を何気なくこなしながらに廊下を歩いていく

保健師がある場所は基本的に職員棟に属するため

時間的には通常の一時間目——入学式の本日は自己紹介などのLHRと化しているであろう時間ゆえに

誰にも出くわさななかったが……

「ちよっ……?!?!」

「見て見て……!」

「あ、アレって山田ちゃんだよね……?!」

「うわぁ……いいなぁ……お姫様抱っこ……」

一般教室棟に入れば、必然的に廊下側の窓ガラスから一夏と真耶の姿は一目瞭然

しかも入学式の後。全校生徒が各教室で担任からの伝達事項程度し

か話が無い事をいいことに

「初の男性IS操者の付き添いになると……あ、あんな羨ましすぎる待遇に……！」

「や、山田先生……！ズルイ！」

好き勝手に生徒達が我先にと視線を浴びせる。小声で話し合う。ついでに一部の先生も……

羨ましそうに真耶へと羨望を、瞳を煌かせて一夏へと熱いモノを、ズルイとジト目等の黒い感情を

様々な瞳と表情が交差するも……何食わぬ顔で歩き続ける一夏。そこから辺は元来の織斑一夏らしい反応――

――あ……年頃のお嬢さん方には、憧れのシチュエーションって奴ですかね……

でもなく、ある程度の辺りはつけつつ進む。完璧に把握している訳でもないが

なんとなく当たりをつけて

――チンピラ相手に空想しても仕方ない。っと……

更に肩を竦めつつも目的地へと歩を進め、辿り着く

クラス名を指す表札。一年一組の扉前にて立ち止まり

抱き上げている真耶を再度軽く揺らして、自身の身体へと寄りかからせて

片手を一時のみ開放して開け放つと

「何をやっていたのだ。山田先生、伝達事――」

「いちかあつあああ?!?!」

「嫁えっええええ?!?!」

「一夏様あああつ?!?!」

「一夏あつあああ?!?!」

「一夏ああつあああ!!!!!!」

最初は此方へと視線をやる事無く、黒板代わりに使われるISのハイパーセンサーを応用した

多目的半透明ウィンドウが複数展開し、生徒達へと伝えるべき事を口頭とソレらを使って伝えていた千冬は

開け放たれたドアに立っている者を真耶だと判断

確かに、真耶自身も居るも……生徒達が啞然とした表情

一部。良くてコメカミをひくつかせるか、悪ければ唇の端を禍々しく歪ませる等の負の感情が渦巻く相貌にて

訝しげに思い……そちらへと視線を向けてみれば――

上から千冬、ラウラ、セシリア、シャル、KUUKI……じゃなく箒が叫び、一様に一夏へと指先を指し示す事となり

「お届けモノを届けに参りました、よつと」

自身に身体に寄せていた身体を再度、抱え直して教室内にお姫様抱っこのままに入り込む一夏

「で、姉^{アネ}さん。マ―ヤ嬢ちゃんは何処に置いておけば？」

「知らん！！そこら辺に捨てとけ！！」

「そんな、ご無体な……」

辺りを見回そうとしながらに手元の真耶へと顎をしゃくって指し示し

千冬へと問うも、一刀両断で切り捨てられた言葉に嘆息を吐くも――

「iiiiiiii、一夏様あ！な、なんで、山田先生を、その――」

「嫁えええええ！！！！貴様、私という者が在りながら何たる事を！

」

セシリアが勢いよく立ち上がり捲くし立てる様に言葉を紡ぐが……

言葉にしたくない単語を前に

ヘタレだし、割って入るラウラの怒声

「い、いちか……ひどいよ。僕の事は遊びだったの……？」

瞳を潤ませ、身体を縮こませながらに涙目でか細く問うシャルの爆弾発言に

「い、ち、かああ……先の、仕打ちに、更に、山田先生。其処の、女子」

瞳を怪しく光らせ、ドス黒いナニかをオーラの如くに噴出させ

ドス。ドス。という擬音が、さしずめ……死を予感させそうな足音を盛大に立てつつ

一夏へと迫るKUUKI。違ったHOUKI。でもなくて筈

「お、ま、え、はああ……私の神経を余程、逆撫で——」

「黙ってる、篠ノ之。貴様の都合は後回しだ」

声音もドス黒く染まらせて、問い詰めようとする筈であったが

背後に回った千冬によって——あっさりと横合いへと追いやられる

襟首掴んでポイツ。という感じに教え子を壁に放り投げる千冬

流石、専用機持ち（…………）。展開されていない状態であろう

とも

量子状態^{パッケージ}であれ、ISと操者は常に見えない糸で繋がっているかの
ように

最低限の機能を生身でも行使する事が出来る。身近な例で言うならば…機体の一部装甲であつたり

相互干渉が起きるIS所持者の場合では、直接肉体に影響を与える
力の行使は抑止されるも

残念ながら現状では専用機など持っていない筈には千冬の為すが
ままになるしかなく

まあ…そもそも、持っていたとしてもモンドグロツソ初代総合優勝
者相手に抗えられるのかと問われれば

乙女の根性に期待する。としか言いようが無いものであるが…

「一夏」

そんな事は私には関係ない。を地でいく

平坦で抑揚の無い声音。ただ言葉としてのみ。いや、冷徹な印象を
与えるのみの声音と眼差しを持って

「へえ。なんですか？姉さん^{アネ}」

一夏へと問うも

肝心の一夏は教卓の真正面。最前列中央にて空いていた生徒用の机が空席である事を

訝しげに思いながらもコレ幸いとお姫様抱っこしていた真耶を其処へと座らせ

「……いい度胸だな。一夏」

「いや、度胸って…ずっと抱えているのは骨が折れますぜ？」

「ほお……骨が折れるか。まあ、いい。その言質に免じてやろう」

言外に真耶が重いと強調する。席に座って――

「よかったなあ。真耶。抱えてられんという事だそうだ」

狸寝入りをし続ける。千冬にしてみれば、一夏を虎視眈々と狙う女の一人

如何せん仇敵の一人と言う声音と態度――両の肘を抱いて蔑む視線を持って見下ろす

「ひ、ひどいです！！先輩！ーちゃんも…って、何処に行くの？
いーちゃん？」

流石に千冬相手に騙し通せるわけもなく、エライ言われように猛然と立ち上がって憤慨する真耶

冷めた視線で睨みつけるように見やる千冬へと涙目で抗議しつつ

教室から出て行こうとする一夏へと素朴に問いかける

「何処って言われましても……私には私の仕事がありまして」
あたし あたし

「一夏。お前の仕事場は今日から此処だろうが」

千冬が指差す先は——先程まで真耶が狸寝入りしていた席。生徒用の机へと向かっており

ソレに対して、教室内の殆どの女子が黄色い歓声を上げて色めき立つ中

「はあ……。姉さんアネ聞いていないって事はないと思うんですが」

「なんだ？何を言っている？一夏」

教室の扉へと掛けていた手を外す事無く、殊更に強調する事無く

「私あたしや、生徒じゃなくて講師を担当する事って通達がきてるんですが」

「……………はあああつああ？！？！」「……………」

ヒロインズ＋大人の女性二名の素っ頓狂な叫びが教室を満たす

堪らず、一夏は鼓膜を守るように人差し指を耳に突っ込んで耐えて

「IS学園。学年主任、織斑千冬の現状を鑑みた結果。個人への負担著しく大きく、よって戦技教導の密度が低下しているというデータ状での結果を鑑み」

淡々と朗読していく。今回の辞令に関しての事項を丸暗記したままに

「試験的要素を用いて、IS委員会所属、無国籍。織斑一夏を臨時特別講師として派遣を決定」

「予備項として、一年二組の副担任相当の権限を持つて着任とす」

諳んじて

「ってなことで、よろしく願いますよ」と……学年主任殿」

片手を上げて陽気に一夏は教室から出て行く

「きいてないいいいい！！！！」

数多の乙女達の慟哭のような叫びが木霊したとさ

一夏の仕事（後書き）

感想の方には目を通しておりますよ

お久しぶりです。とりあえず、徒然と伝えたい事書きます

頻繁に更新とかは出来ないと思う。気分が乗らないと書かない人なので

千冬姉が間違った方向に全力疾走したすと思います

でも、やっぱり鈴ちゃん贖罪が強め。でも、ハーレムチックに

生徒会長だっけ？アニメしかみてないから原作のキャラはほぼ出ないと思ってください

のほほんさんとか、ガチでKUUKIなんでのほほんさん見たい人は他の方を

……他にもあると思いますがとりあえずコレで

質問ある人は活動にコメるか感想で。答えられる範囲で答えます

波乱の幕開け（前書き）

舌の根も乾かん内にアニメ登場していない人出ちゃった

波乱の幕開け

— I S 学園 一年二組

扉を開けたら、其処には胸があつた

そう。胸。大きさにしてEはあるであろう物体——

「押し付けてくれますかね？脂肪の塊。息出来ませんや」

「ひど？！一夏、ひどいわよ……」

「……ええつええええ？！……」

ソレの持ち主たる彼女はおっとりした声音

対照的に教室の一名を覗いた生徒達の歓声が響き渡る

「生徒さんが面食らってますぜ？……とつとと離れやがれてんだ。
ナターシャ・ファイルスさんよ」

「酷いわ……。やっと再会出来たつてのに、一夏は嬉しくないの……？」

ナターシャ・ファイルス。一夏は鬱陶しそつにそつ言葉にする

目前に立つ女性に対して——

さて、米国所属である筈の彼女が其処には立っており

「今度も御国からの指示で？」

何故、この場に居るのは

「違う、違う。まあ……おイタが過ぎて恐いおじ様達に怒られてね
ー。お家から追い出されちゃった」

「いや、テヘツて顔されても私にや関係ないでしょうが」

「やあん。一夏冷たあゝい……。私のこと」

唇だけが象る。言葉を――食べちゃったくせに、と

「……はあ、^{あたし}私や何処行っても苦勞する事は確定なんですねぇ」

ガリガリと頭を軽く搔きながらに深いため息を吐く一夏

大体は想像がつくであろうが記しておこう

おイタハニートラップ。おじ様達ハ各国。

ようは、一夏のIS適正が発覚し……紆余居説にしてすったもんだの
拳句に世界を飛び回る生活が始まってから

訪れた米国での一騒動。世界を権威している自称する大国

それがISだけは極東の、しかも自国の軍事基地を堂々と設置し自

分達の顔色を常に伺う事しかできないと

己惚れているアメリカにとっては由々しき事態。さらには——世界唯一の男性IS操者までもが……

この事態に面白くなく（……）且つ由々しき事態と先進国は拳つて一夏へと接触を迫る中

大胆にも、初手を仕掛けてきたのが件のアメリカであつたのだが――

如何せん。人生百戦錬磨と言つても過言ではない雪車町一蔵相手では億が一でも望みは無く

結果。物の見事にあしらわれるは、おいしく頂かれるわの結末に……

なお、この事態で真意は各国上層部にそれとなく伝わっており謀略関係は望み薄と認識されことなる

まあ……所属先のIS委員会ですら手を焼く所ではなく、焼却されかねないと戦々恐々しているぐらいなのだから

高々、二十歳ソコソコの小娘では話にもならなかったと……

「頑張れ。お、と、この子！」

そんな事は本人としては些細な事であり。当のナターシャは

頗る欧米人特有の白い指を当てつつに茶目っ気たっぷり言い切る

「へえ、まあ……とりあえず自己紹介つてところで、何が何やら生徒さん達の殆どがついて来てないですしねえ……」

白けた視線でナターシャを一瞥してから一夏は教卓の端末へと自身の名前を打ちこみ、ウィンドウに展開しようとするも

教室の一角から唐突に席を立つ音が響く。盛大に、容赦なく、乙女心を

「いいい……ちいい……かああ……」

完璧に無視したやり取りは、地獄の死者すらも裸足で逃げ出さんとするほどに寒気を持って現れる

「……ありやま。こりや、さっきの焼き増しで……」

ホンの少し背筋に冷や汗が垂れそうになる感覚を覚えつつ、顔を引きつらせながらも声音だけは陽気に紡ぐ一夏であるが……

「アンタって奴は……いつも、いつも……何処かでぜえっええたいに！女引っ掛けてるわよね……？」

表情は割愛する。彼女——鳳鈴音の名誉の為に

「気のせいじゃないですかい？」

明後日の方向を向いてすっ呆ける

「へえ、ほお……言うわね……なら！！アイツら何なのよ？！！」

「……すごく、一組の生徒さんと先生方。ですね」

「シャルに英国女、西洋人形っぽい口リ、おっぱいお化け！あと、知らない奴！」

一夏が立つ教壇からして後ろ側に位置するドアにコソコソと隠れるようにへばり付いて中を伺う――

「きいいい！！まだ、言いますか！！この中華娘」
ドロボウネコ

「あははは……。いや、なんていうか…事前に掴んでた情報と事実が？み合わないなーって…」

「西洋人形とは私の事か？というか口リとはなんだ？」

「はう？！その、えと……」

「私だけ扱いが酷くないか？！」

上からセシリア。シャル。ラウラ。真耶。最後は箒

「アンタの結果がコレよ！！」

「………何処で道を間違えましたかね」

「すごく、遠い目でいい笑顔だけど私も気になるなー。一夏」

肩をイイ感じに軋む音が空耳なら嬉しいなと思いつつも

「はい。はい……で？マーヤ嬢ちゃん。一組の専用機持ち引き連れ

て何しに？」

「あ、えっと……聞いてた伝達と食い違いが、その……」

「……姉^{アネ}さんは？」

「千冬先輩って違う。織斑先生は理事に問いただすと息巻いて……」

「……あの、冷戦沈着。姉御と規律を足して服着て歩いているよ
うな、姉さんが？」

「ですう……」

真耶の涙目に対して額に手をやって空へと顔を向ける。本日何度目
だろう？あろう程に深い溜息を洩らしつつ

「さいですか。とりあえず戻ってくださいな……教室に他の生徒置き
去り——」

「来てしまっているぞ？嫁よ」

監督する者が真っ先に此処へ来てしまっていれば、必然

姦しい女生徒のみで構成されていると言って均しいIS学園ならば

——
自ずと分かりきっている結果であり

「ささ！私達にはお構いなく、自己紹介を！」

「……アンタさん。誰ですか？」

「一夏。この子二年生よ」

「ああ?! ファイルス先生黙っててくださいよ……」

騒ぎに乗じて登場するはIS学園新聞部副部長。 まゆみ 黛薫子

副業で整備科のエースもやっていたりする眼鏡にバレッタで髪を止めた薄い茶髪の少女が口元尖らせて抗議すると

一組、二組の話について行けてなかった一般生徒たちが次々に薫子に同意して

「そうそう!! 新聞部の副部長さんの言うとおり!」

「先輩の仰るとおり!! 私達にも織斑君の自己紹介聞かせてよ!」

喚きだす。というより歓声上げて催促する少女達を前に

「こんなん……大丈夫なのかい? この学校……」

まともに教育を受けた事など——一度もない一夏にとって目の前で繰り広げられる騒動は一抹の不安を抱かせるも

「まあ、こんなものよ。 アメリカ 家の養成所も平時のノリはこんなんだったし」

「けひ。 あたし 私や、やって行ける自信皆無ですわ」

嘆きは悲しくも、少女達の催促と煌く瞳の前に霧散していく

観念し、深く考える事を放棄した一夏は先程の続きを続ける

教卓の後ろにある黒板の前へと半透明のウィンドウに自身の名を表
示させて

「苗字は織斑。名は一つの夏と書いて、一夏。織斑一夏」

ツツツと言葉を紡ぎだすと一斉に静まり返る教室内。軽く溜息を
吐いて続ける

「ま、格好からして生徒だと思われませんが……一応、講師として赴
任。ついでに二組の副担任相当ってことで」

「「「「「?!ええええつええええ?!」「」「」」」」」

「はいはい。静かに!一夏が続けられないわよ?」

ナターシャが戒めて一夏を促す

「年も変わらないので、まあ、驚かれると思いますが——IS委
員会所属の男性IS操者つて言えば知ってる人は居るか?」

「へえ……!君があの世界唯一のIS操者。“ストライブ”での特集
記事だと顔写真は載らないから、年齢は同じ位ってしか知らなかつ
ただ」

お姉ちゃんに高く売ってやる。と思いながらに相槌を打つ薫子の思
考を

「あ、ちなみに貴女。一夏の写真学園外に出したら――」

晴れ渡るかのような笑顔とは対照的に底冷えしそうなほどに寒気を持った声音で

「コレだから」

「……えーと。物理的にですか？それとも、社会的に……？」

「やあね。両方に決まってるじゃない。何で表沙汰になってないか、軽く考えたら分かるはずよ？」

薫子に対して親指で首を掻き切る仕草をするナターシャ

青くなった顔色で問いかけるも朗らかに断言されて、断念する

――まあ、もう少ししたら出回ると思うけどね

心中でそう思いつつに、とある企画を思い出すナターシャであるが……もちろんの事億尾に出すわけも無く

「続けてよろしいですかい？」

「「どうぞ、どうぞ」」

対照的な顔色で持って促す二人を尻目に続ける

「担当はISの実技及び座学ってところで。何か質問は？」

「はいはい！！織斑って、織斑先生と同じだけど？」

「へえ、私の実姉あたしになりやすわ」

「はい！織斑君って彼女居ますか？！」

「カ！突飛な質問ですがな。まあ、関係ないのでお答えしませんが言えたら嬉しい我が身で」

「ソレって彼女募集ですか？！？！」

その言葉に教室内の生徒約一名と後ろのドア付近に固まる数名の女子と女性の瞳を光らせ

隣に立つ。担任も舌なめずりせん勢いで一夏を凝視。鳥肌が立ち、視線が恐い

「いやそついう訳では在りませんぜ」

一気に言い切る。視線が和らぐ。無意識に吐息が洩れる。舌打ちが七人分聞こえた

「もう質問ありやせんね？はい、お開き」

「待ってください！！一夏様！」

「……なんですかい？オルコットの御嬢」

「其処の方もですが——」

ズビツと肩を開き威風堂々たる姿で人差し指でナターシャを指し

「其処の中華娘に、この方々も、ご説明して頂きたいものですわ！
！」
ドロボウネコ

次いで、鈴。シャル、ラウラ、真耶、箒の順に人差し指を動かしていくセシリアは

「それと！なぜ、私はファミリーネームで御呼びにいたしますのです？！不公平ですわ！」
わたくし

頬を膨らまして、更に一夏へと問い詰める

「いいじゃないですか。セシリアさん……わ、私なんて年上なのにお嬢ちゃんて……」

サメザメと涙を零して愚痴る真耶であるが

「山田先生はお名前で呼ばれてるではありませんか！！」

「……そうだな。其処のイギリス人と同じ言い分であるが、私の名も訂正を要求するぞ。嫁」

ジト目で真耶へと睨みつける。それに便乗してラウラも問い詰めだし

「僕も。シャルのお嬢なんて、他人行儀な言い方じゃなくて……その、シャルって呼んで欲しいなあ……」

両の人差し指を突き合い、頬を染め上目遣いに一夏へと願うシャル

「私など、ボー嬢ちゃんだ。嫁よ、我が名をはつきりと呼べ。そう、愛と愛しさと愛情を込めて」

「それ全部一緒だ！！私なぞ、再会してから一度も呼ばれてないんだぞ？！」

「皆いいわね……私なんか一夏ったら恥かしがって名前と呼んでくれないのに」

女三人寄れば姦しい。ならば恋する乙女——若干、乙女というにはどうあ、はいすいません——七人集まれば姦しいでは済むことなく

ピーチクパーチク好き勝手言い放題の中を

「ふっふん」

ただ一人、勝ち誇った態度。改造した学園の制服。肩の部分だけ割り貫いた……ノースリーブの肩を大きく広げ

無い胸を一生懸命に反らせて——全員を見渡しながらに宣言する

「なあにいゝアンタ達もしかして一夏からお嬢ちゃん扱いされてんの？」

「なっ？！そういうお前こそどうなんだ？！」

箒が鈴の物言いに頭にキながらに語尾を荒げて問い返すと

「聞いて驚きなさい！そして、アンタ達の出る幕は無いと自覚しな

さいー！」

ダンと響かせて机に足をかけて声高に

「私は一夏に鈴音^{あたし}って呼ばれる仲よー！」

ドヤ顔全開で言い切る姿に

「ぐっ、貴様……それに嬢ちゃんが付け足されるであろっ！」

「お生憎様！昔はあんた達と同じで嬢ちゃん呼ばわりだったけど、今は。い、ま、は！呼び捨てなのよー！」

「い、一夏様？！本当なんですか？！」

ラウラの？みつきに、後半部分を盛大に強調しつつ迎撃する鈴。涙目で一夏へと迫り寄るセシリア

「へえ、まあ…そうですが」

——鈴音も私のお遊びから始まっただけですがね…

胸中を曝け出す事は無く、なんだかんだで現在の呼び名が一夏にとつては一番呼びやすく思い入れがあるのでトントンである

「思わぬ伏兵だよ…！一人だけ二組でハブられてると思ってたら、一人勝ちに呼び名にもこんなに差が…！」

歯を食い縛って呻くシャル

「でも、確か……鳳さんって鈴音^{リンネ}って中国読みだから、ソレも愛称じゃない？」

主席薄片手に鋭く反撃するナターシャ。それに他の者達は淡い希望を持つも――

「ぎゅんねん！鈴音^{リンネ}ってのは一夏が迷いなく。そう、迷いなく！私^{あたし}の為だけに！鈴音^{リンネ}って決めたのよ！」

完璧に切り返す鈴。鈴以外の者達が縦線背負って落ち込むが

「一夏様！私^{わたくし}にも名前を！」

胸に手をあて、懇願するように上目遣いに瞳を潤ませながらに迫るセシリアを筆頭に

「嫁！」「一夏！！」「私の事覚えてるであろっな？！」

最後が一番必死であることを記しておこう……

「とりあえず……」

「「「「「とりあえず？」「「「「「」

「チャイム鳴りますから、お開きって事で」

「はーい！予鈴鳴ったわよ。解散。今日は半日だから、お昼食べたら館内広場の寮割りも一回チェックしてから部屋に行きなさい」

頭上のスピーカーカへと指差した瞬間に、乙女達には無残にも終了を告げるチャイムが鳴り

それに相槌を打つように手を鳴らして群がる女生徒達へと声高に告げ

「ちっ…仕方が無い」

「次に持ち越しですわ」

「いや、昼餉で問い質す!!」

「私も聞きたいことあんのよ…!!」
あたし

各々が視線を交わしあい相槌をうつて一夏へと向き直ると――

「………つて一夏（嫁）（様）は?!」「………」

「とつとと行っちゃったわよ?」

澄まし顔で教室から出て行こうとするナターシャが代わりに答えて、彼女も教室を後にし

「………逃げやがった……!」「………」

齒軋りせんほどの形相にて悔しがる少女達であった

シャルロットさんのターン

―IS担当職員待機室

「エライ目に遭いやした…」

「自業自得だと思うわ。一夏」

間一髪。というよりも小賢しいと言える手腕で危機を脱出し

胸を撫で下ろす一夏に対して、白けた表情で呟くはナターシャ

二人が居る場所は職員室とはまた違った。学年担当の教員の詰め所

世界中から生徒が集まっていると言いきれるこのIS学園

各エキスパートの教職員が数多く詰めるも……特にIS関連に関しては世界各国何処も敏感であり

限られた教職員のみ——言いきると、IS関連の学科に携わる者のみにしか開放されていないこの場所は

「遅かったな。一夏」

先客にてソファの背凭れの上に片手を乗せ、もう片手の方にはマグカップを持って寛ぐ千冬の姿があり

「……ちつ。余計なモノまで付いてきたか」

「あら、千冬、じゃない。義姉様じゃないですかあゝ」

「貴様に義理の姉呼ばわりされる謂れは無い…！」

咄嗟に口をつきそうになる言葉を飲み込んで、口元を掌で覆い隠しながらに言葉を紡ぐナターシャ

対して、額に青筋浮かべ…口元を牽くつかせながらにドスの効いた声音で告げる千冬

「姉弟揃って、酷いのね。私はこんなにも……一夏のことを愛しているのに」

「…年を考えるボケ。そもそも、コレは私の“物”だ」

「千冬こそ、“色々”と考えて発言した方がいいんじゃない…？」

犬猿の仲を地でいく二人を置き去りに、一夏は千冬の対面に自分で用意した湯飲みを持って座る

我関せずを貫く姿勢だが――

「一夏！お前からも言ってやれ！纏わり付かれて辟易していると！」

「そんな事無いわよね？千冬の方こそ、さっさと弟離れしろって言うてやってよ。一夏」

そうは問屋が卸してくれるはずも無く

「……………あたし私を巻き込まないでくれませんかね」

「当事者だろうがぁ!」「当事者でしょ!」

年上二人に一喝される始末。仕方なしに

「はぁ…どっちもどっちと…で、姉さん結局、私はどうなるんで？」

話の矛先を先の時間に理事へと殴りこみ——掛け合いに言った事を瞬さする

言葉の先に投げやりに答えを出しながらに問う手段を用いて

「ぬ、く……まあ、いい。本題が出てきたのだからそちらが優先だ」

細長い端正な眉を忌々しげに一瞬のみ歪めるも……咳払い一つして千冬は答えだす

「お前が屈指の操作に戦闘技術を持っているのはIS委員会^{つわやく}はしっかり把握して、送り込んでいるんだ。解任はできんが…」

忌々しそつに言葉を吐き

「まあ、一応…姉さん^{アネ}の剣の師でありやすからね…」

「ふん。何時までもお前に師事したままではないかな」

「へえ…どつかで見たことあるなって思ったら、千冬の方が伝授されてた方なの」

元・米国代表のナターシャが合点がいったと首を振りながらに相槌の手を入れる

「続けるぞ。だが、お前が未だ未成年である事もまた周知の事実。義務教育すら満足に受けさせてやれなかったのだ」

瞳の中の色合いが剣呑と شدしすも

「多少の融通は利かせた。……少々、使いたくない力を使ったが」

脳裏に浮かんだ――機会のウサ耳を装着する天災を思い出してウンザリした表情になってしまう

「後が怖いんですぜ？姉さん……」

「背に腹は還られん。今」という時間は、お前の人生において重要なだからな」

そう言つて、柔らかな微笑を浮かべ一夏が座るソファの後ろまで来るとポンと頭に掌を置いて撫でる千冬

——…カカ。ご苦労なこつてからに

何も言わず、ただ湯飲みを傾けて茶を啜り干冬の為すがままになる

「で、結論は——お前は一年一組生徒も兼任する事になる」

「は？」

であつたのだが……続く言葉に思わず、間の抜けた言葉が洩れ出る
「ちよつ?!ちよつと、ちよつと!千冬!どうして、そうなるの
よ?!一夏の担当授業は如何するのよ?上が態々、戦技教導の為に
派遣してきたのに潰すつもり?」

流石に横合いで邪魔するのも悪いと思つて黙つていたナターシャで
あるが

千冬のトンデモ発言に目を白黒させながらに慌てて抗議する。流石
に……たった一人で姦しい女学生を相手に出来るわけも無いという打
算も入っていたり

一夏と二人で授業をするという願望もあつたりではあるが――

「ふん。分かっている。本末転倒にならん為に――組を合
併する」

「「はあ?!」」

「一夏。お前の授業の時はお前が講師。それ以外は生徒として出席
するという事だ」

「いや、ちよつと待つてよ?!二組分の教室なんて学園には無いわ
よ?!どうやって生徒を収めるのよ?!」

「なに、簡単だ。教室の壁をぶち抜けばいい」

この千冬。何処かのネジがぶっ飛んでいるようだ

自身のIS。第3・5世代“桜花”のハイパーセンサーを流用してホログラフィック映像を展開し

一組と二組を隔てる壁を再現して、映像上にてISを着込んだ千冬が真つ二つにして豪快に壁をぶち抜く映像を映し出す

——それなんてエロゲ？

二人が思うことは見事までにシンクロする。一夏とナターシャは共に間抜け面を晒す

「なんだ？二人して、アホのように口を半開きにして」

「いや、アンタに言われたくないし」

「失敬な。他に案があるのか？あ？」

「…姉さん。^{アネ}もう少し、慎みを持ってくだせえ…色んな意味で」

ガチでゴリ押しの一辺倒にゲンナリとなる一夏

「まあ…私^{あたし}の為に骨を折ってくれたことですし、素直に感謝しておきますよつと…けへ」

「誠意も籠つとらんし、お前絶対に感謝して無いだろう…」

ジロリと睨みつけ、次いでジト目で一夏へと視線を送った千冬は息を軽く吐いて

「それと——アレだ」

背後へと指先向ける。強化ガラス。緑色の色合いを持つガラス越しに見える物体

“モノバイク”。隣の部屋の中央に位置し、様々な機械類が所狭しと並び

傍らに解析の結果などを把握する為のオペレートシートのある部屋にて堂々と鎮座するソレへと指差し

「一夏。お前、アレが何なのか……知っているのか？」

半ば、いや、半信半疑で知っているだろうと当たりを付けながらに……先程までの軽い空気を吹き飛ばし

殺気にも似た強烈な空気を醸し出しつつ、一夏の一拳一動を見逃さない。尋問官のような瞳で問いかける

必然的に相対する一夏もナターシャも身を引き締めつつに臨み

「けひ、解析を掛けたんでしょうに……」

口元を歪め、ともすれば嘲笑ってるかのような笑みに眉を顰めて

「……本当にお前は根性が捻じ曲がってるな……」

大きな溜息と呆れた声音。額を掌で覆いながら

——どうして、私は、コイツが……

隠された相貌。掌の隙間から覗き見る一夏の姿

明らかに此方を試しているような相貌であり、ただ困らせたいとう風にも取れる癪に障る相貌

どちらとも取れるそれが、酷く千冬を？き立てる

——弟……だというに、

そんな千冬を横合いから見やる

——ホント、手に取るように分かるわね、千冬。見てて飽きないわ……

ナターシャは口元をニヤリとニヤケさせて

「ほら、一夏。もったいぶってないで教えてよ」

素早く一夏の後ろへと回り込み。背後から抱きつく

「ナターシャ。お前、余程、私を怒らしたらしいな……」

「熱くならない。脱線してるわよ、千冬」

「お前がさせているんだろうが……！さつさと、一夏から離れる。それにお前とて関係の無い話では無いだろう……！」

「お生憎様。お家叩き出されてから、私そついう方面は極力タッチ

アメリカ

したくないし…それに一夏が使ってるのよ?」

目元が糸目状態の一夏の首元へと廻している手の指先をチツチツと左右に振りながらに

「あの一夏が。面倒ゴトは勘弁つて一夏がよ?」

——あたし私の人生。絶賛、面倒ゴトに転がされてますがね…

「言い訳になるかボケ。それに、コイツが幾ら遠ざけた所で」

「「トラブルの方からやって来るだろうが(もんね)」」

「声揃えて、言わんでくれませんか?立つ瀬が無いですぜ…」

両者共に抜群にハモらせて一夏へと向く。真っ白く燃え尽きたように哀愁を漂わせておざなりに答えた

「ふん。コイツの体質は今関係ない。とつとと退け」

「もう!イケずよね…千冬つてば」

「知らん。脱線しすぎた、で、一夏…どうなんだ?」

有無を言わさぬ迫力に肩を竦め

「解析結果は把握しておりますかい?」

「…………構成物質は大半が鋼。ただの鋼に近く」

瞳を閉じて、脳内に記憶した情報を引き出しつつ

「要所要所に解析不能な流れ。そう——」

睨みつける。楽しそうに千冬が紡ぐ言葉を静かに聞き入れる一夏を

「特殊な製造方法。いや、“鍛造”と言った方がしっくりと来るか……」

「恐らく、元の材質は日本刀など使われる玉鋼やら鉄鋼などが材料なのだろう」

「形作るだけなら、ISの開発と同じだ。似たようなモノが作れるという結果は出ているも——」

「真似るだけだ。どう、足掻いたところでコレと同じように作り上げる事は不可能ときた」

深々と千冬の言葉を咀嚼するように聴き続ける一夏の様子をつぶさに見ながら

「どうしても、一夏が行っていた“装甲板を中空にて躍らせ、かつ自立的に纏わせる”芸当を行える代物にはならない」

息を吸う。大きく、断言する

「ISという技術を持ってしてもだ」

軽く鳴る。一夏が両の掌を打ち合わせて拍手を送り

「という事は、もう天災の姉さんアネには？」

「馬鹿者。私一人で手に負える代物ではないのは表層解析を行った段階で分かっていた、なら……仕方ないだろうが」

「で？回答は？」

「一夏に聞けと。こう注釈も付け足されたうえで、だ——」

「“いっくんが話すなら教えてあげるとも”な」

更に剣呑としてくる。空気が、纏う雰囲気、

「こう言われれば、お前に問い質すしかなくなるだろう……が！」

——……えらい地雷を埋めて行ってくれましたね……

刺々しくなる千冬。胸中でボヤキながらに

「ふーむ……量子化パッケージからのシークエンスに実体化プロセスを割り込ませ——」

盛大な音が響いた。全力で持って

「一夏！——！」

教員用の執務机を叩きつける。大きく凹む

職員室などにある……あの灰色の鉄製の机が意図も簡単に

思わず、ビクツと肩を震わせたのはナターシャ。話に食い込む事が出来ずにいるので静観を決め込んでいるも

滅多に見る事の無い。千冬の形相——一夏が“アレ”に巻き込まれて以来の表情に

「……へ、調べたところで“ココ”で鍛造することは不可能なんで……まあ、気にするだけ取りこし苦労ですぜ？」

流石の一夏も潮時かと感じて紡ぐ

「何せ、“水”が必要ですからね。ヒへ、一番大事なモンが“ココ”にや、無いのでどう足掻いたところで……」

「作る事は出来やせん。スッパリ忘れて、アレは私の獲物^{あたし}ってだけで認識していれば大丈夫ですよ」

「それで……納得しろと？」

「納得する、しないとしても——上に報告したところで、作る気も起^{おこ}こさせない代物でしたでしょう」

「……………いいだろう。お前の口車に乗ってやる。天災^{アレ}もわざわざ、お前が話さなければと言ってきた事だ」

脳裏に思い浮かぶは、世間的に雲隠れしていると公表されている束が

わざわざ。そう、わざわざ

“人間と認識もしていないような群体生物の一個辺程度にしか思っていない者達”に圧力掛けてでも

一夏の――

「^{ッルギ}劔胄とやらの件。話せるようになれば、必ず私に話せよ？愚弟」

「けへ。まあ、頭の片隅に残しておきますよ」

^{ッルギ}劔胄に関しては禁句だと徹底させている位なのだから

委員会側も……ISの創設者にして唯一のコア製造が行える者のヘソを曲げる事は勘弁という思惑と

IS学園側から提出された件の^{ッルギ}劔胄。九十式竜騎兵のデータを見れば、構わないと判断したのだから

「いいか？！絶対だぞ。絶対に、私にイの一番に報告するんだぞ？」

「…それは、フリですかい？」

―深夜　男性職員寮

アレから千冬とナターシャを交えてコレから学園に於ける事を細部に詰めて

気が付けば、夜空に星々が掲げられる時間帯にまでズレ込み

――春も始まったばかりは寒いもんで

学園内でも、一段と遠く離れた此処。数少ない男性職員の為の寮へと足早に進む一夏

冷たさがまだ肌に刺すのか、しきりに手に息を吹きかけながら歩く彼の視界に――

扉の前であろう。ソレに背を預けて、蹲る様に膝を抱えて座り込む遠目からではブロンドにしか見えない髪。なぜか、一夏以外に男性用制服を着込む

「?!何、やってんですかい?!シャルのお嬢?!」

「あつ、一夏」

シャルロット・デュノアに深夜だというに素っ頓狂な叫びを上げて駆け寄る

一夏の呼びかけに寒さで真っ赤になった頬を上げて、暢気に呼びかけに答えるシャル

「こんな、冷たくなって……風邪でも引いたら如何するつもりですかい?!」

「い、一夏の手……暖かいな……」

大慌てで真っ赤になってしまった頬に無意識に手を寄せて心配する一夏と相対的に

シャルは頬に寄せられた両の手を掴んで、はにかみながらにポヤポヤと答える

さっきまで暖を取ろうと頻りに擦っていた自身の手——総じて、女性と男性の手の温度は驚くほど男性の方が高いが故に——雲泥の差に

小さな幸せを見つけてしまうシャルであつたが

「それにしても、何故にこんな時間にこんな所で……?」

「その、ね。一夏、僕の格好分かる?」

「いや、そりゃ、分かりますが……って、まさか……」

一夏の問いかけに対して問い返すシャル。まじまじと見つめなくても一目で分かる格好に

「うん。なんか、ね。僕……男って事で入学手続き行われたらしく

て」

「ちっ。ミスりましたか……」

珍しく、本当に舌打ちする一夏に申し訳ないと思いつつ

——一夏には悪いけど……コレも僕の幸せの為なんだ……！ごめんね。一夏

内心で勘違いしている一夏へと謝罪しながらに

「一夏の性じゃないよ。なんか、父さんが作ってた書類をそのまま流用しちゃったからでさ」

一夏を慰めるように告げ

「その、寮の部屋。用意されてなくて……」

「それでね……それでね。一夏あ……」

上目遣い。瞳を潤ますのがポイントで

「さつきも言ったとおりに、書類上じゃ、僕まだ男の子って扱いになっただけ……」

幾ら男装して——と言っても男子の制服を着ているだけだが——
——いても掛け値無し的美少女たる

シャルロット・デュノア。並の男なら破壊力抜群すぎる程の仕草——
——さらに胸元で祈るように両手を合わせる姿で

「その、えと、泊まる所が、ね」

「……とどのつまり。部屋が用意されていないから泊めて欲しいと？」

コクコクコクコクと勢いよく上下に頭を振るシャル。輝きに満ちて流れるような淡い蜂蜜色の髪が

動きに連動して小刻みに揺れ動き

「その、僕、親しい女友達。此处に居なくて……元々、隠し子だったし……」

しょんぼりと肩を崩して、伏き気味に。遣る瀬無い感情と声音でポツポツとしゃべる

——なるべく、一夏の気を引けるように精一杯演出する。恐ろしきは恋する乙女ということか…

そんなシャルの心の奥底。ホンの少しだけの暗い打算など気付く事も無く、気付いていても

「力力。ま、入りなさんな。部屋が用意されるまでは家に居ればいい」

チンパン
雪車町一蔵であり、織斑一夏である一夏では微妙に勘違いする事大絶賛である

「一夏あああ！！」

大輪の花が咲く。正しく、そう形容できるほどの笑顔。それを伴ってピョン。という擬音がピッタリなほどに飛び上がり、一夏へと抱きつくシャル

喜色満面。我が本懐を遂げたりと言わんばかりの表情。如何せん、フニャッと蕩けた恋する乙女の笑顔で

頬と頬がくっつく位に抱きつく

「きへ…もう、夜中ですぜ？大声は御法度ですし……」

抱きついてきたシャルが体勢を崩さないように、しっかりと腰を抱きしめてやりながらに

「年頃の娘が、容易に男に抱きつくものではありませんと」

「へ……？キ——」

「真夜中ですよって…からに」

兄が妹を諭すような表情。少々疲れた感じに一夏は溜息と共に吐き出す

物の見事に、キョトンとするシャルであるが……微かな空白の後、自身の眼前に一夏の顔があるという事態を

ようやく、しっかりと把握する事になり思わず悲鳴を上げかけるも人差し指で唇を押さえられて塞き止められる

「あううう……」

茹でた蛸のように真っ赤になって一夏の胸の中に顔面を隠すシャル。
耳元まで真っ赤で…月明かりだけが頼りの廊下ではより一層と

目立ち、“あの”一夏からしても

——やはり、高嶺の花ですな

心中でゆっくりと首を縦に振る仕草を醸し出しつつに見やる

指を通せば、一切の抵抗を感じさせないであろうセミロングの淡い
蜂蜜色のブロンド

男性IS操者としての教育を詰め込みされ、一人称が僕になってしま
まっけていても

——ふーむ。世の中には“僕っ娘”という需要がありますからね…

変わらずに、女性らしい声音と気遣いと奥床しさ。そして、思春期の
少女らしい

——引く手数多。だというに……花の園の一輪とは、世間も因果
なこって

いい意味での自己主張を少しだけ表に出す。気立ての良い娘さんに

——まあ、いい仕事になってよかったですぜ…キヒ

“ちよいと良い事”して良かった、良かったと思う一夏。伊達に

シャルの為だけに、無茶した甲斐があったと内心で軽く何度も頷き
「ま、取り敢えずはとっとと部屋に入りましょうか。下手に見つか
ると面倒になりやすい」

「う、うん。一夏……」

部屋へと入る其の姿はまさしく——休憩場所・に連れ込むように肩
を抱く

チンピラと美少女と言つ図に見えたのであった

「解せぬ」

遠くの星を睨みつける黒髪ポニーテールの少女が居たとか何とか…

シャルロットさんのターン（後書き）

原作的に。彼女が最初の同室ですしね。

あ、あと作品中の擬音

フニャツとか、キョトンとかの擬音に違和感は無いですかね？

マブラヴみたいなシリアスだと極力こういう系の擬音は使わないようにしている

んで——シリアス調の作品では壊しかねない言い回しなんで

違和感あれば教えてください。今のところ、一応前後に描写を入れているんでそんなにキツクはないと………思いたい

シャルロットさんのターンエンド

― 男性寮 一夏の私室

水滴が流れ落ちる

鼓膜を穿つのはタイルに叩きつけられる水音と

自身に掛かるシャワーが噴出すお湯が肌に当たる音

瑞々しい。思春期特有の蕾みのような美しさ

まだ大人の女性とは言い難いモノはあるも、この年ならではの美しさを称える身体

水を弾く珠の肌と言いきって構わない身体を全身丁寧に磨き続けるのは――

―― どどど、如何しよう。どうしようー!!

黙々と、ソレこそカチンコチンという擬音が最適なほどに固い動きをするシャル

―― これってあれだよな?! アレだよな?!

完璧にテンパッている。動きはぎこちなく、頬は熱による赤さではなく

コレから起こるであろう出来事に対しての不安と期待による感情の高鳴りから齎され

脳内妄想がヒートアップ。完全暴走を引き起こしている

——しよ、勝負下着なんて、僕持っていないよー？！ど、どうしよう？！い、一夏に幻滅されちゃうかも？！

瞳の色合いが白黒を通り越す勢いの形相

——た、只でさえ、一夏と始めて会った時の印象良く無いし、今の僕って男装状態だし…！

浴室内で一人でにらめっこ。もとい、百面相を行いながらも

爪先から指先。髪の毛の先端、そうして——”一番”大切な場所を丹念に、丹念を重ねて洗い続ける

——し、しましまでも大丈夫かな…？

脳裏に描くはお気に入り。色はご想像に御任せする

——レース。レースが一個、在った気が…！出発前にジャック伯父様が送ってきた奴…

色はご想像に御任せする。大事なこりゃ

——や、でも……こ、ここは思い切っておニユーのを…！

チンピラと出会い、焦がれる想いから発端したことによって

最近、頓に購入しだしてきたティーン向け雑誌に載っていた

世間で一番の流行。押しが入っている……自分自身でも

——でも、アレ凄過ぎるよ……！！

些か…色々な意味で過激すぎる物を思い出し、より一層と赤面する
思わず、しゃがみ込んで顔を両手で覆って恥らう

——うん。うん、無難にいこう！気合入れすぎて、一夏に引かれ
たら元も子もないし

——でも……周りはライバルだらけだし…

洗い流す。体中を泡だらけにして、肌の艶を更に際立たせ

——気づいたら、持っていていかれてたなんて……絶対、嫌だし

今度は髪の毛へと移行する。普段は後ろ髪を尻尾のように纏めている
シャルの髪であるが

入浴時は、特に普段の印象とは違う。ただ、シャワーの前に真剣そ
のものの表情

しかしながら、思考は桃色一色。乙女全開状態であるも

真っ直ぐに立ち尽くし、流れ落ちてくる湯をそのままに受ける姿は

凜として、毅然とした少女の姿。戦う乙女。戦乙女と見間違えてもおかしくない位の気品に満ちており

「よ、よし！行くよ、僕！」

ああでもない。こうでもない。と散々に考えた結果、彼女は長すぎる入浴を切り上げ

浴室から出る。持ち込んだ大型のキャリーバッグからバスタオルを引っ張り出し

次いで――

「……（ゴクッ）」

生唾を飲み込む音がシャルにはやけに大きく感じられた

足早に拭い去った水滴の残りが額を伝っていくのも認識しないままに両手で掴んで伸ばす。形が崩れないように、伸びないように持ちながら

シャルが選んだ物は（ご想像に御任せします）であり

「勝負だよ。一夏……！」

瞳に燃え盛る闘志を秘めて、寝巻きを纏い浴室から一歩踏み出すも

「だよなー」

ラブコメなのだから

ハイライトが消える。瞳の中から

思わず、洩れた。諦観と遣る瀬無い気持ちのみで構成する声音が

目前にて、学生服の上着のみを脱ぎ自身の腹へと被せて

御約束どおりにソファーにて眠っていた一夏に対して

——僕の決意なんだったんだろう……

乙女の覚悟を決めてきたシャルは呆然とそんなことを思う

も——乙女という者は大抵にして

「はあ……ん？……!!」

ただでは起き上がらない。眼前にてシャルに対して全幅の信頼を寄せているのであろう

生粋の雪車町チンピラ一蔵のままであるなら、絶対にありえないなれど

織斑どんかんおう一夏でもある一夏には

「うんしょっと……」

小さく掛け声が上がる。眠る一夏を起こさないように

極力、物音が起きないように注意しつつに一つしかないベッドから

毛布と掛け布団を引っぺがして、持ち上げるとシャルは其れを

掛ける。自身と

「よし、いい感じだね。……あつたかいなあゝ一夏は……」

元々ソファーに陣取って寝ている一夏に

仰向けに眠っている一夏の胸板の上に頭を乗せる

体は鍛え上げられた…齡16の年頃の男とは思えないほどの引き締まった腹筋

ソファーから垂れてしまっていた右手は女性のとはまったく正反対の様相

さながら——豹。極限まで無駄を省かれた、実用性のみ肉体に

——今更ながらに、僕は途轍もなく”すごい”ことしてるよね…
…／／／

垂れてしまっている腕を取り上げて自身の胸の中に仕舞いつつあるシャルは

頬をどころか、先程までの湯上りのまま。全身が蒸気を上げている

ように感じられ

思わず仕舞いこんでしまった腕を自身の胸元にて抱え込んでいる有様に視線を向け

—— 男の人の腕って……皆、こんな感じなのかな…？

今は抱え込んでいる。されど、その腕は—— どうしようもなく辛い己を救い上げてくれた

—— 違う。うん、違う。この腕は、世界に一つしかない

己の問いに己で完璧に否定する。唯一無二、世界中、何処を探してもありはしないだろう

—— 僕を包んでくれる。腕は……” ココ” にしか

織斑一夏という男は

—— ” 一夏” しか居ないんだ

目と鼻の先。身を寄せる男しか居ないんだと強く確信すると、安寧を得られた体は

「ふぁ……。時差ボケの身だと辛いや…」

内なる欲求に素直になつてしまい、小さく欠伸をする。小さいながらも襲い来る睡魔は強大で

「J e l · a i m e。一夏」

ただ、その一言を残し

伝わる体温を感じながらに眠りに落ちていく

何時の間にか、その蜂蜜色のブロンドに乘せられていた手に気づかないままに

夢を見ている

一夏は一番最初の”認識”はそう感じ取った

夢の中で認識しているというのも……些か、可笑しいのだが

普段の己の行動からして、絶対にこのような事はしない筈だ。というよりも、したくななどない

誰が”五人ほどによる合奏にての軽快な歌”をBGMに走るなど…

更には、後方から追走してくる彼女達。四人少女達＋大人の女性二人

横・一列に並んで走っている様は軽快を取り越して、不気味にしか見えない

誰も彼もが一樣に笑顔で一夏を追いかけてくる姿など――

――何の罰ゲームですかい?!

割と必死に腕を振り、足を振り動かそうとするも

呪いにでも掛かっているだろうか? 一定の速度しか出ない足にもどかしさを――

「ちょっと待て一夏?! 夢の中でも私はこんな扱いか?!」

訂正。先に四人と上げたが……後方に少し遅れる少女が一人

「あ、居たんですかい?」

「酷いぞ一夏?!……前回も今回も、くっ……! 私がなぜ、このような役回りにならなければ!」

「元から星の巡りが悪いですからねえ……貴女は」

「名前で呼べ! 名前で!」

必死の形相で一夏の言葉に食らいつき

「わ、私とてえ……!」

猛然とスピードを上げる。思わず

「ヒヘ?!」

「脅えるな?!ばかもの!!!」

からかってしまいたくなる程に一所懸命で直向きな彼女に対して

”大好き”だからこそ、一夏の唯一といってもいい。曲げられない信念とでも言うべき

”一生懸命”な人が好きだからこそ、彼女だからこそ

「なぜ、私はこんな奴を!!!」

苛めたくなくなってしまふというのが一夏の心情。だが、しかし

やり過ぎた感が胸の奥から重く押し掛かってきそうなほどに、懸命な表情に

——まあ、からかうのはココまでにしま

心中でちよっぴり反省しつつに声を掛けようとするも

「ほ——カペ?!」

後方より、砂塵を上げていると揶揄出来そうなほどの爆走状態で

「「「ちよっ?!抜け駆け?!」」」

突っ込んできた千冬は一夏の首根っこ掴んで、勢いそのままに走り抜ける

咄嗟にISを部分展開したラウラ、鈴は己の獲物を一夏へと投擲して絡めとろうと

セシリアとシャルは懸命に腕を伸ばす

無言で量子化を解いた各々の獲物。得意距離が近接ではなく、遠距離狙撃型及び砲撃型の大人二人は

ライフルを千冬へと即座にロックオンして

投擲されたモノは後ろにも目があるのかと説きたい位にあっさりと回避され

一cm腕を伸ばせば、一メートル引き離されているようなぐらいの対比の腕を伸ばす組は端から牽制にも成らず

大人二人の攻撃は、此方もISを部分展開して”雪片”を盾代わりに使う。伊達にスロット全部食う武装の強硬さは並ではなく

あっさりと飛んできた銃弾と砲弾を防ぎきり――

「ふん。貴様らに一夏はやれんよ」

「いや、おかしいから」

開口一番、そのたまった一夏の眼前に

「ほっほ…何がおかしいのかしら？一夏。私の納得^{あたし}できる答えを聞かせて頂戴よ？」

額に青筋を立てた制服姿の鈴が目前にて立っており

「は？」

「私も聞かせてもらいたいものですわ。一夏様^{わたくし}」

自身の胸の中で眠るシャルとは違って、薄みであり絹糸のような繊細さを際立たせるブロード

その髪をかきあげる仕草はまさしくお嬢様

由緒正しい貴族の血筋が織り成す高貴に満ち満ちた仕草は、頓にセシリアに似合っている

まあ……額に青筋が立っていなければ、なお良かったのだろうが…

「なあに…もう、朝なの…？」

般若を沸騰させるほどに瞳の眼光が怪しい二人

一夏とその二人の間にて、眠そうに眼を擦りながらに上半身を起こす
寝惚けているその姿。一夏の胸元から顔を起こし、被っていた掛け
布団と毛布を手繰り寄せながらに

「…寒いや」

今一度――

「お待ちなさい?! シャルロットさん!!」

「シャル。あんたイイ度胸ね…!」

一夏の胸元に顔を寄せて、頬が密着した瞬間に思わず口元を緩める
ぐらいに幸せそうに二度寝に突入したそうとする

シャルをセシリアは掛け布団と毛布を、鈴はシャル本人を一夏から
引っぺがす

それは、もう…惚れ惚れするぐらいの連携プレイ。昨日、始めてI
S学園にて出会った二人とは思えないぐらいに

「なんだよ…」

「いい加減に目を覚ましなさいな!! 何時まで、一夏様と!」

「そうよ! そうよ! 私^{あたし}だって、昼寝ぐらいしか――」

「……それはどういふことですか? ド、ん! 鈴さん」

余計な一言を言ってしまったが為に、味方が第三勢力と化してしまう
剣呑な瞳で鈴を睨みつけ、思わず国籍を揶揄した呼び方で呼ぼうと
するも咳払い一つして散らしながらに

セシリアは問いただす。昨日——真耶からコンコンと説教された
が為に

「べ、別に……。ロー……！セシリアに関係ないじゃない！今はシャル
の事だってば！」

鈴も思わずつきそうになった揶揄する名を引つ込めて矛先をシャル
へと持っていく

「そうですね！！シャルロットさん！貴方なぞ、一夏様の部屋に？
！」

耳元で騒ぎ立てられていたせいか。完全に目が覚めてしまったシャ
ルは

「そ、それは、その……僕、部屋がなかったから……」

両の人差し指を突つつき合いながらに明後日の方向を向くシャル

「そんなの！私^{わたくし}の部屋に御泊りになればよろしかったこと！」

「そうよ！何で、よりによって一夏の所に転がり込んでるのよ！」

「だって……僕。書類手続きの間違えで男の子として入学——」

「そんなの言い訳になりませんわ!!」「言い訳になるわけないじゃない!!」

両サイドから捲くし立てられる剣幕に思わず、涙目になってしまうシャル

「抜け駆けしたシャルには罰が必要よね」「ですわね」

「えええ?!そんなあゝ…」

更に追い討ち掛け始めるも――

「ほお、なら貴様ら全員にペナルティだな。勝手に人の嫁の部屋に押しかけよって…」

「あのゝ…皆さん。一応、此処は男性限定区域なのですが…」

二人が割り込む。不敵な笑みであり、不機嫌そうにも見える面持ちのラウラと

困り顔の真耶の二人……混沌と化してきた部屋内で――

「で、揃いもそろって私になんか用ですかい……」

渦中の人間にして、放置をくらっていた一夏が盛大な溜息と共に言

葉を吐き

「今日は休みのはずですがねえ」

告げた言葉に

「へ?」「は?」

鈴とセシリアが間の抜けた面を晒し

うんうんとシャルとラウラが頷き、真耶が苦笑を浮かべる

「えつと……鳳さん。オルコットさん。本日は例年通りの時差修正の為のお休みとなっているんですよ?」

世界各国からIS適正者が集まってくるこの極東の地にてIS委員会が統治する…ようは治外法権が適用されるこの地にやってくるのは

日本と正反対に位置する国々の人間などもやってくる場所であり

「皆さんはまだ学生。未成年の方々。親御さんからお預かりする立場の学校としては無理をさせる訳にはいきませんからね」

真耶がのんびりと説明するように、二十歳にも満たない少女達

取り分けISという一歩間違えれば大惨事を引き起こしかねない力を扱うにあたっては細心の注意を払うは必然

いくら、ISに”絶対防御”という機能が搭載されていようとISを個人所有。つまり専用機持ちの生徒など学年全体の数%しか居ないならば

その恩恵を受けられない大多数の一般生徒は事故が起きれば――
最悪……

まあ、これが

「ヌルイものだが……規則は規則だ。従うまで、私はそんな気を使つて貰うほどに柔ではないがな」

ラウラのように軍人として育てられているのならば、軍人を育成するのであれば

そんな生温い事はないだろうが、如何せんISを軍事利用することは国際的に禁止されているが故であろう規則に

判然とした態度。腕を組んで踏ん反り返るラウラは

「して、嫁よ。朝食を食べに行くぞ。早く支度をしろ」

一夏へとそう告げる

「二人きりでな」

余計な一言を付けて

「「「だめえ！」「」「あつ、先生も一緒にしたいです……」」

すかさず盛大に否定した少女組みとラウラは牽制しあいだし、真耶は物欲しそうな眼差しで一夏へと告げ

「とりあえず」

「「「「「？」「」「」」」」

「^{あたし}私や着替えたいので、部屋から出てもらえませんか？」

「あ。僕も——」

「「「アンタは（貴様は）（貴方は）コッチ！」「」「」

シャルの首根っこ掴んで引きずる三人とルールルと涙を流すシャル

「で、マ—ヤ嬢ちゃん」

「はい？」

「……着替えが見たいと？」

「？…はうあ？！」

少女達を見送っていた天然が入った教師は真っ赤な顔で逃走し

「はあ…やれやれですわ…」

一人ゴチて着替え始めるのであった

「……一夏の部屋は何処だ？」

校舎内及び寮内をひたすら徘徊する剣道少女が居たとか何とか…

セシリアさんのターン

― I S 学園 食堂

「しっかし……こんな大所帯は久しいモノで」

一夏がそう呟くのも仕方ない

彼の視界内に映る人数は合計すれば五人

自身を含めば六人。その何れも一夏を除けば全員女性

「仕方ないじゃない。誰も散ろうとしないんだもの」

先頭にて今まさに盆に載せられたラーメンを受け取りつつに答える
は鈴

「まあまあ、皆と一緒にご飯が食べられるのはいいことだよ」

次いで言葉を紡ぐはシャル。載せられた物はパエリア

先の一件によってヘタな事を口にすれば、何とか逸らした罰が再び
降りかかってくるかもしれないと思い

無難な言葉で場を流そうとするも

「ふん。貴様らが勝手に我が嫁の私室に入り込もうとしなければ、
こんな騒々しい食事にならなかったものを」

ラウラの一言で水の泡。そんな彼女はフィンガーポテトとグリルサラダセット

「あわわ……！ボーデウィツヒさん！そんな事を言っではいけませんよ！シャルロットさんの言うとおり、みんなで食べるのはいいですよ？」

教師らしく生徒の暴言を嗜めつつに焼き魚定食を注文する真耶

四人が四人共に朝食としてチョイスするには少し重めなのは

「まあ、騒がしい食事もなかなか……ここ数年は良くてマアや嬢ちゃんと一緒に程度ですからね……まともな食事は」

一夏の着替えによつて、お昼前に近くの時間になってしまったが為である。まあ……何せ前日に風呂に入るタイミングを逃してしまっている故に

流石に女の花園で不衛生。というよりも男臭いというのはマナーに反するとシャワーを浴びていた為である

「……（ギロツ！）」「」「」

「ひうつ？！せ、先生をそんな目で睨まないでください？！」

だが、そんな事を気にする少女達も大人の女性も居ない。というよりも一夏が遅くなるなら自分も待つと

恋する少女達は必然的に選択する。この場で先に行く＝戦線離脱はライバルから永久的に追放されると同意義であるが故に

「力カ。別に特別な何かがあった訳じゃありません……パーティーやら何やらが行く先々で多い人生でしたからね。必然的に」

嘲る様に口元を歪め、クツクツと癪に障る忍び笑いを含んで

「家庭料理や食堂などの普通の食事を取るのがマ―や嬢ちゃんと一緒の時ぐらいってだけで」

「……………そ、その通りなんですけどね……」——いーちゃんの意地悪……ちよつとぐらい……

あつさりと告げてしまふが故に、乙女の本能的に危機感を抱くような事態はなかったと悟った少女達は溜息を吐いて

真耶から視線を外す。残されるのはサメザメと力なく泣く真耶のみ
そうして、真耶の焼き魚定食が盆に載せられて……いよいよ一夏の番となり

彼は口を開く。日本に帰ってきて……帰ってきたという言葉は立場的におかしいが血筋的に言えば帰ってきたと言っている

祖国の地で始めて食す食事は――

「冷やしたぬき。特盛りで」

悪魔の如き食べ物を注文する。そう、何処かの正義バカ少女が頼も

うとして

根暗星人と店員の少女に一笑に伏された外道の如き、食べ物を

「「「「「?!?!」「「「「「」

場が騒然となる。皆が皆……愕然とした表情を

鈴も、シャルも、ラウラも、真耶もが驚きに満ちた表情を浮かべ

たのは――

「では、私も一夏様わたくしと同じ物を」

ちゃっかり、最後尾に付いていたセシリアの一言に反応しただけ

「お。合いますな」オルコットのお嬢

「もう、一夏様。私の事も御名前で呼んで欲しいですわ」わたくし

「ひへっ。同士たるオルコットのお嬢の頼みですからね……そのままは味気ないので、セシリーとお呼びさせてもらいますか」

「セシリー……一夏様わたくしが私の一夏様だけの私の御名前を……！」

あまり、共感される事のない自身の食事の好みを共に注文したセシリアに気分が良くなる一夏

余程……冷やしたぬきが邪道とされていた世界で生きていた事が鬱憤として溜まっていたのであろう

セシリアに請われるままに渾名をつけるといふ事態にまで発展するのは

——くっ！嫁よ！そんなチヨロイ奴に先に名を与えるとは……！

——い、一夏の奴うう！私^{あたし}だけだったっていうのに……！

——せ、セシリアさんに先越されちゃったよ……！

——いいな……オルコットさん。いーちゃんに名前だけで呼ばれるなんて……

そんなやり取りを目前で見ていた彼女達全員が全員、互いに視線を交し合つて

「……すいません！これキャンセルで冷やしたぬき一つ！」

「」

一斉に盆をカウンターのの上に置くも……当然ながらに

「出された物を粗末にするとは……贅沢なもんですな……」

食堂の方及び一夏から駄目だしされる。特に……まともな人生を歩んできていない

如何せん、人並みな人生とは無縁。どん底よりマシ程度の底辺を生きてきた雪車町^{おりむらいちか}一蔵からしてみれば

そんな物は通用する訳もなく——

一夏の物の言いに頷く食堂の方が気前よく、一夏の冷やしたぬきにちくわの天麩羅を乗せ、天かすをたっぷり乗せてくれ

「ひへ！コイツはありがたい。私あたしやちくわも好きですし、天かすも好物で…特に冷やした汁に少量つけて一気に食べるのがまたなんとも」

あの、ボリボリとした食感と油がたまらんですわ——等と言いながらに瞳を輝かせて丼を受け取る一夏

「コレが日本の有名な麺料理。うどん、ですか…一夏様、早く席に参りましょう。伸びてしまいますわ」

「そうですな」

次いで受け取ったセシリアが丼の中を一瞥し、丼に目がいってしまっている一夏に気づかれないように

流し目で勝ち誇った眼差しでカウンター前で唸る残りの少女達と真耶へと送る

「……うううう……！」

歯噛みするしかないも、食卓を囲む機会を逃さないように仕方なく各々が注文した物を持って足早に付いていく

「さて、いただきますか」

掌を合わせ、親指の付け根の間に割り箸を握らせながらに一夏は祝詞を上げて

「いただきます」「?」「嫁よ?」「なんですか?それは?」

鈴と真耶は同じように手を合わせるも……EU圏組みとロシア娘。シャル、ラウラ、セシリアの三人は一夏たちの行動に?を浮かべ

「ああ。食事の前の感謝の言葉や祈りつてとこで。日本式のね」

三人にうどんを掬い上げながらに一夏は告げて、一気に啜りだす

「そうか」「ふーん」「そうですのね」

「?」では、いただきます」「」

三者三様に納得しながらに一夏と同じように手を合わせる。郷に入っては郷に従えという感覚でもって

だが、しかし――

「あ、あら?」

ラウラはフォーク一本で事足りる。シャルも同じようにスプーン一本で

共に今まで生活していた場所の食事と同じなのだから、食事に使われる獲物

食器は多国籍にに応じて、全てを取り揃えていると言っても過言ではないIS学園の食堂

自分達が今まで使っていた物と同じ種類の物が用意されているので扱うのに難はないが――

「はら？くつ、この！」

「せ、セシリアさん？」

「何を踊っているのだ？貴様」

「あんだ、ヘタね。箸使うの」

「…スプーンを取ってきましようか？オルコットさん？」

一度たりとて使った事のない食器。 ”御箸” を前に悪戦苦闘を繰り返すセシリア

うどんを掬い上げるところか、手の中で踊っているような不可思議な動作を繰り返す始末

「きいい！食器の分際で、このセシリア・オルコットを愚弄するつもりですか！」

「愚弄してんじゃなくて、おちよくられてんでしようが」

箸を綺麗に揃えて丼の淵と淵にかけ置いて、人差し指を突き刺してイキリたつセシリアに対して

冷やかな横目でラーメン啜りながらに告げる鈴

「言いましたわね！鈴さん！」

「どうでもいいけど、あんたソレとつとと食べないと伸びきっちゃうわよ？」

今度は鈴に対して噛み付くも、アホらしいという表情のままに忠告する

「くっ…！このー！」

再度、箸を手にとってプルプルと震えて、可笑しい持ち方で箸を構えるも――

「あああっー！」

「……………不器用なのだな。貴様は」

ラウラにすら白けた瞳を向けられる始末。最終的に落としてしまうという失態

「うううう……………」

「自業自得とはまさに、この事」

「抜け駆けするからそついう目に会つのだよ」

「あ、はははは……………」

「無理しなくていいですよ？オルコットさん」

涙目になって恨めしげにうどんの丼をジト目で睨みつけるセシリアに言いたい放題のラウラ。抜け駆けという言葉の最後で自身を睨みつける鈴に乾いた笑いしか上げられないシャル

教師としての気遣いを発揮し続ける真耶と——”一人”を除いて

「セシリー、何をしてんですかい？」

「はう？！……い、一夏様あ……」

女性陣の姦しいと一夏的には表現できる出来事など、眼中に無しと黙々とうどんを平らげていた一夏は

ある程度を食した所で一段落つけたところで介入する。不思議そうな面でセシリアへと問うと

当のセシリアは——

「その、恥ずかしながらに……私^{わたくし}、日本の食器を使うのは初めてでして……」

頬を羞恥心によって赤く染めながらに、しゅんと肩を落として一夏へとポツポツと答える

「ふむ。まあ……箸は海外の方にやあ、扱いづらい物ですからねえ……」

合点がいったのか、一夏はセシリアの井がまったく減ってないのを確認しつつに

「ちょっと、お待ちになつてくだせえ」

「「「「「???」」」」」

セシリアに一言告げて、一気に残りをかっこみだす一夏

そんな様子に全員が不思議そうな顔して、一夏の方へと向き

「ふい。ご馳走様でした」

「お粗末様です。いーちゃん」

「いや、山田先生が作ったわけじゃないし！それにその言い方は納得できないわ！」

決して、真耶の言い方が夫婦っぽい言い方だからと口を挟んだわけではない。と、鈴は胸中で言い訳しながらに突っ込み

「おや？箸は？」

「嫁よ。コヤツ落としおった」

「ら、ラウラさん！！」

「そうですかい……なら、まあ……致し方ない」

そう言つて一夏は——自身の箸を使って、セシリアの井のづどんを掬い上げて

「ほれ。セシリー、口をあけて下さいや」

セシリアの口元に持つていく。当然の如くに

「ああああ!!一夏!アンタ何考えて?!!」

「い、いちかあゝ!!だ、ダメだによ?!そ、そんな事!!」

「嫁よ!!愚かな真似は止せ!!」

「は、破廉恥ですよ!!いーちゃん!!」

素つ頓狂な悲鳴を上げる残りの四人。若干一名、舌を噛むぐらいに皆が皆…必死な形相で一夏の行動を止めようとするも

「いや、箸が使えないとなれば誰かが手伝つてやらんと……それに麵は時間との勝負ですし」

そう言いつつに一夏は残りの四名の皿を見渡し

「あたし私はもう、食い終わりましたしね」

「だ、だからって!アンタが食べさせる必要ないじゃない?!フオークなり、スプーンなりで食べれるでしょ?!」

「……鈴音。そりゃ、わびさびつてもんが無いですぜっ。うどんは箸で食うのが一番と」

御分かりで？視線で最後に鈴へと告げつつある一夏の横で

「い、一夏様ああ……」

うつとりとし、瞳を嬉しさで濡らしつつにキラキラとした面持ちで一夏の横顔を見つめるセシリアは

「あーんっ」

「ほれ」

真っ赤な、鮮やかな緋色を携えた舌。小さな口に似た小さなソレ

舌先がほんの少し下唇に乗せて、催促する。一夏へと瞳を閉ざし雛鳥の様に庇護を求めるようにして

甘えるセシリアに対して一夏はホイホイと釣られる

舌先の上に麺を乗せる一夏の箸。思わず、セシリアは挨拶のように舌先を動かす

一夏が口に含んだ割り箸。彼の液体が……男の一部が残るソレへと舌先を這わせる

高鳴りすぎて弾けてしまいそうになる心臓の鼓動だけが鼓膜を打つ
感覚を覚えながらに

頬を離れた割り箸が離れていく。名残惜しい気持ちもあるが……今は早鐘を打つ“心の音”。ソレが限界を振り切って壊れないように名残惜しくも、見送るようにして——頬を押さえる。朱に染まった頬を両手で押さえながらに

「おいしいですわ……」

——幸せとは……かくも、こういう味なのですわね……

満面の笑顔。其処には家柄を背負い、一人孤独と戦う高貴な少女ではなく

ただ一人の男に焦がれる少女の表情を称える人間が居て……

「そいつはよかった」

満面の笑み。いつもの人を食った笑みではなく、年相応の雪車町^{チンビ}——
蔵^ラの感性を持ちながらに

織斑^{どんかんしょうねん}一夏らしい無邪気な笑顔。少年らしい屈託の無い笑みを浮かべる男が居て……

—— ああ、やはり

ソレを見据える少女は、悟る。完全にして、完璧に

—— 私^{わたくし}はこの方を

セシリア・オルコットは織斑^{チンピラ}一夏の事を

—— お慕いしておりますのですね

不意に締め付けられた胸元に右手を左手で覆いながらに握り締めて

—— 見惚れた

セシリアさんのターン（後書き）

セシリアのあだ名は作者的にはちょっと微妙かなと…

なんかいい案あったらどうぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1997x/>

元はチンピラ。今世もチンピラ？

2011年12月27日01時42分発行